

ペーパーバック 『高屋敷の十字路』

吉田 恵吉

私的〈隆明〉書誌紀行―追悼にかえて―

2

日暮らし通信：プレイバック

7

十字路からの発言 本の一言…司書の卵

29

私的〈隆明〉書誌紀行―追悼にかえて―

吉田 恵吉

おまえは吉本読みの吉本知らず、吉本知らずの吉本読み”ではなかったか。

吉本さんがお亡くなりになったニュースを聞きおよんで、日頃から手や眼にした吉本隆明著作の二次情報を掲載してきた「隆明網」の著作リスト作業がつのめりそうだったとき、横浜の甥から関東圏で配られた「訃報」掲載各紙の朝・夕刊記事の束が届いた。水避けフォルダーには小さく「元氣を出してください」と書いた付箋が貼ってあった。

氣を取り直すようにはじめて、ブログなどのネット媒体や新聞から週刊そして月刊誌へと掲載の場が拡散する「追悼記事（文・特集）」を追いかけたリスト作成の漏れを、三月書房店主や猫々堂主人に埋めてもらったりしながら、途絶えた〈新著作リスト〉の〈書誌的空白〉が半年あまりに。

追っかけ吉本著作の読みさし書誌データの打ち込み作業記録みたいな『隆明網（隆明・ウェブ）』をはじめ前の「吉本隆明」とのであいはどのようなにはじまったのだろう。

一九六二（昭和三七）年五月に地方大学の図書館に職を得て、本や雑誌をあつかう仕事にたずさわるようになってからのこと。たまたま読みあさっていた太宰治の「ヴィヨンの妻」が発表された雑誌『展望』（筑摩書房）の復刊を知り、それで継続購読しはじめてほどなく、吉本隆明の頁を見つけ、たちまち傍線や「」や◇などの印をつけて読み返しては、次が読みたくて仕方がないという駆け出し読者のひとりになった。

その前から追っかけていたお気に入り海外ジャズメンの演奏みたいに、市内のジャズ喫茶でひたすら輸入盤新譜の入荷を待ったような網では吉本著作情報が拾えず、新聞や雑誌の出版広告が気になりました。大学キャンパス内の生協書籍部や市内の本屋だけではなく、出張先でも古本屋をのぞいたりするようになった。

図書館に出入りしていた当時の学生の吉本著作の貸出・返却がさほど目立たないような五福キャンパスで、時には千人を超えたりした学内デモに石を投げたら吉本読者にも当りそうな雰囲気だった。

一九七〇（昭和四十五）年の四月に、富山市内の本館から高岡市内の工学分館への配置換えを命じられ、ちょうど刊行中だった『吉本隆明全著作集』（勁草書房）が分館の書架に並んでないことに気づいた。分館運営委員会提出用の「学生用図書購入リスト（案）」に書き入れて選書しておいたことなど忘れ去ったある日の昼休み、工学部の活動学生の一人が訪ねてきたのには面食らった。吉本著作を蔵書に入れたことへのお礼かたがた、反対派学生の実力行使に遭ったりしていいいか確かめにくかった。

その頃かわりあつた同人誌仲間や、分館事務室に出入りしはじめた紀伊国屋書店富山営業所の新社員とも吉本を語り合ったり、数年後に出戻った本館の新入職員にも吉本読者がいたり、さまざま吉本読者の声に耳をそばだて、「否応なしにこの世界で生きていかねばならない」いま・ここに・あることのあてどなさの渦に巻き込まれるたびに〈信〉や〈真〉をめぐる言葉を秘めた著作の頁を探した。雑誌掲載著作の拾い読みから思潮社版『吉本隆明詩集』をはじめとした単行本へ、そして勁草書房版『吉本隆明全著作集』へと聳え立つように見えだした吉本著作の書誌的山脈への数ある登り口のひとつを、『初期ノート 増補版』（試行出版部）の「短歌四首」に見つけた。

勤め先の書庫のさほど多くなかった吉本著作の背表紙が特別な眺めになり、いつの間にかレコードを売ったりした金で買って読むだけじゃなく、吉本主宰の『試行』の直接予約購読にも手をのびした。著者自筆らしき封筒の宛名書きや奥方の事務連絡葉書の書き込みに、雑誌に書かれたものや本になったのを見つけて買うのとは違う手触りを覚えた。後々に出かけた吉本講演を録音し、模造紙をつないだ直筆レジュメを写し撮ったり、テープを起こして講演主催者や著者に送った内容を『』に載つけたり、書かれたものから語られたものまで奥行きが深まる吉本著作書誌を立体的に閲覧できる仕組みの模索が続いた。

吉本著作にたどってみた「魚津」や「立山」をめぐる文言には見えない「称名滝」に近い称名小屋あたりの尾根筋から、立山登山の初歩みたいは大日岳を目指したりしていた読者心に響いたのだろうか。「紫陽花の花のひとつら手にとりて越の立山われゆかんとす」『初期ノート 増補版』が目にとまった。そしてまた「六月にうつる紫陽花の色のようか」「時のなかの死」のフレーズをふくんだ詩のなかでも見かけることとなった。

ひとはどのようにして画布のごとき死からのがれた生をみつけたか

ささいな愉しみと食べものの味覚

抱く手やまなざし

産みだされた幼児の酷似

こころの釘にひっかかった借財

そのひとつに重たい時間をつけて

しだいに死は死のまま生をつみあげた

残酷な八月の停止を忘れ

へ二九四五年八月のノートから

紫陽花の花のひとつら手にとりて

越の立山われゆかんとす

手を取りてつげたきこともありにしを

山河も人もわかれてきにけり

物の怪のような大豆かすに

失調した五年

を裏切るような思想のデータを憎悪した十年

さて時のなかで生はひとつの価値をなす

〔時のなかの死3〕のはじめの部分〕『ユリイカ』5(8)1960.08.01〕

著者が勤労働員先だった魚津の日本カーバイドで過ごしたあいだの一時、作業仲間と息抜きに立山に出かけて「称名ホテル」を営む夫婦像に心動かされてほどなく、一九四五（昭和二十）年八月十五日の敗戦を機にじ

ぶんの無知を思い知らされ、絶望と苦悩が敷き詰められた茨の道から世界を把握する方法を探し求めた研鑽の日々のひとこまを、一握りの書誌的遡行と引用で偲びたい。

*一九五九年八月「十四年目の八月十五日」、『新刊ニュース』昭和三四年八月号『吉本隆明全著作集5』

「敗戦のとき、まだわたしはひとりの学生であった。ただ、学業を正規にやったのは数カ月で、もっぱら動員にかり出されて生産線にいた。十四年前の八月十五日は辛い日であった。学問をろくにすることがない学生が、まったく価値崩壊に出遇って、途方にくれたまま、生産線から学校へ復帰しようとしていた。」

*一九五九年十二月「戦争と世代」、『自由劇場』3『吉本隆明全著作集5』

「敗戦の日、わたしは動員で、富山県魚津市の日本カーバイドの工場にいた。その工場には、当時の福井高等学校の集団動員の学生と、当時の魚津中学校の生徒たちがいた。わたしは天皇の放送を工場の広場できいて、すぐに茫然として寮へかえった。何かしらぬが独りで泣いていると、寮のおばさんが、「どうしたのかえ、喧嘩でもしたんか」ときいた。真昼間だというのに、小母さんは、「ねててなだめなさえ」というと布団をしき出した。わたしは、漁港の突堤へでると、何もかもわからないといった具合に、いつものように裸になると海へとびこんで沖の方へ泳いでいった。水にあおむけになると、空がいつもとおなじように晴れているのが不思議であった。そして、ときどき現実にかえると、「あつ」とか「うつ」とかいう無声の声といっしょに、耻羞のようなものが走って仕方がなかった。

八月十五日以後の数日は、挫折感のなかの平常心のようなものであった。せっかくなので運んだ中間実験工場の設備をこわしたり、工場の石炭を貨車につみこんで運んだりする作業をやった。無表情、無感情で、まさに生きながら死んだものは、こういう具合でなければならない典型的な貌をし

ていた。何かの拍子に笑いがかえつてくると、ひどくはずかしい気がした。わたしがリアリステイックに現実を認識するとは、どういうことを、まなんだ最大の事件は、敗戦である。」

*一九六十年八月十五日「ある履歴」、『日本読書新聞』昭和三十五年八月十五日『吉本隆明全著作集5』

「しかしこれら「当時の読書履歴」引用者注」をすべてあげても、動員生活の労働や、寮生活の友情の葛藤や、戦争の運命に迫いつめられて刻まれてゆく生存感からえとくしたものには及ばなかった。」

*一九六六年五月十五日「情況への発言——ひとつの死——」、『試行』昭和四十一年五月『完本 情況への発言』

「立山の弥陀ヶ原を眼の上にみあげる称名の平場に、称名ホテルという宿屋があった。ホテルとは名ばかりで、旅館というにさえそぐわず、またひとおもいに山小屋とよぶには大きくとのいすぎ、旅宿とか宿屋とかよぶのが丁度よくみあっているといった造作であった。魚津市に徴用動員でいたころだから、たしか昭和二十年の初夏のことである。五、六人で立山に登るつもりでこの宿に泊まった。」

下山してからも（称名のあの宿の主人夫婦はいいな）と口走るほど、立山登山で偶然であった夫婦像が「この世の土産になるかもしれない」と覚悟していた身体を富山湾になげ出すように浮かべたとき、衣服が脱ぎおかれた魚津漁港の突堤にどうやって帰り着いたか。

あの夏は帰ったか？

日のまばゆさのなかに

焦慮よりもっと焦げた

ある瞬時の光熱のなかに

さいはてという言葉が必要ないほど

白く遠い空の果てに

そうすることがよかったのかどうか
悔いの真似事によって

あの空のしたの逢いは帰ってきたか？

焦げるような艶かしさに

もしも「慕」という名を与えたとしたら

どこへ帰ったらよいのか？

いったまま帰ることができない

そんなものにみんな名前をつけるとして

それは生きること自体に似ていた

まるで時間の壁にぶつかるような

（「帰ってこない夏」のはじめの部分）『ユリイカ：現代詩の実験

1974』6(15)1974. 12. 20]

*一九七七年八月十三日「戦争の夏の日」、『北日本新聞』昭和五十二年八月十三日号『初源への言葉』

「ある日、富山市の方向に空が赤く映えて燃えあがっていた。とうとう北陸の都市も灰燼に帰する日がやってきたのかと思ひながら、畑と低い丘のつづきの空を眺めやっていた。東京下町で空襲を体験していたので、かくべつ驚かなかったが、この次には魚津の街にも空襲がやってくるにちがいないという感慨がしきりに沸いた。ふと気がついてみると荷車に家財道具を積んで街外れの方に避難してゆく街の人たちがいる。これにはわたしのほうがびっくりしたが、むしろ空襲に慣れっこになって虚無的に動じなくなつたわたしの感じの方がおかしかったのだ。富山市の火の手は魚津から、実際よりも遥かに近いように視えたので、急いで避難してゆく街の人たちの感じの方が正しかったのだ。」

富山県の西のはずれの埴生村からも赤く燃えあがつた八月一日の富山市の空が眺められ、縁側のガラス戸の棧につかまり立ちした感触が今も残っている。能登沖上空からやってきた「B29」（後で名前を知った）が何機も

上空を飛んでゆく爆音で村中がざわめいたのも憶えているのに、半月後の八月十五日のことはまったく記憶にない。病死した父が勤めていた京城から母子ともども引き揚げてきたばかりの三歳児の記憶だからあてにはならないが、その後を生きながらえた「虚弱児」が「戦争の夏の日」をめぐる著作を読むようになってから、当時の立ち位置の偶然に気づかされたりした。

＊一九八五年三月「思い出の劇場：海辺の劇場」、「PSD」『重層的な非決定へ』

「その劇場は、北陸のある町の街はずれ、海岸の砂浜にあった。一方が波の静かな、浅瀬の水に接し、一方は海岸の砂地によく生えているひくい蔓草の群れで区切られていた。わたしとわたしの友人とは、戦争が終わったばかりで虚脱した気分のなかで、その海岸まで何となく歩いてきたのだ。戦争が終わったと書いたが、戦争は中国や、東南アジアや、オセアニアに近接した島々で行われていたが、その町に戦争の陰がさすことは、とても稀なことであつたから、ほんとは戦争が終わったあとも、終わらないまゑも、その海岸の砂浜のたえずまはる少しも変わらなかった、といっている。変わった、激変したといっているのは、わたしたちの心のなかだけであつた。明日はない。また明日はわからない。ただその町を去らなければならぬことだけは確かであつた。その町ですることは何もなくなつていった。もしかすると、これからの生涯にすることは何もないかもしれない。」

別れの儀式のような一期一会の「海辺の劇場」に出逢い、左廻りに二拍子で「たたら」「傍線部傍点」を踏む演者の輪に連れと加わった舞台を、水際から水平線まで置かれた架空の座席に腰を下ろした観客が眺めているのは、明日のない未来ではなかったか。

富山県魚津市で出逢った「戦争の夏の日」が、立山の伏流水が富山湾の奥深く深層水となって湧き出るように、老年の「エピソード記憶」におさまらない通奏低音となって響いてくる「講演」があつた。

＊二〇〇八年七月十九日「言語芸術論―沈黙から芸術まで―」、昭和女子大学人見記念講堂での講演。

「軍国青年」の「日常」の断絶からはじまった「第二の青春」から語りおこされた、著者八十三歳の講演「『三放映』を聴いた二〇〇八（平成二十）年の夏には、著者が「越の立山」で「紫陽花」を手折った後の「戦争の夏の日」を語った書誌が集中している。

＊二〇〇八年八月七日「各界著名人が選んだ私だけの「世界遺産」：吉本隆明×ねずみホテル」、「週刊文春」第五十卷三十一号

「大学二年生の時、他に遊ぶ場所もないので友人と登った立山で、麓から少し上がったところにある称名ホテルに偶然泊まったんです。ホテルについているのは名前だけで、実際は山小屋。風景はごく普通ですが、宿をやっている夫婦が印象深かった」

「それが、本当に人馴れしていて、僕らの膝の上に乗ってくるんですよ。びっくりしたんですけど、奥さんが、『引っ込んでなさい』と言うと、奥に引込む。でもすぐにまた出てくる。夫婦がいつもは追い払っていないことがすぐわかった。それがまさに、柳田国男の『鼠の浄土』の世界で、感動したんです。これは日本にしかない風俗だと思います。忘れがたい経験です。」

＊二〇〇八年八月十一日「吉本隆明「戦争の夏の日」：終戦と静かな海の記憶」、「北日本新聞」平成二十年八月十一日号

「世界がひっくり返ってしまったのに、波はいつも通り静かで水は温かい。その時に感じた『なぜ』という疑問を、解決することがその後のわたしの文学だったとも言える。生涯で一番印象深い日ですよ」

「あのころは砂地だった。随分たつから、もう変わってしまったでしょうねえ」

「あそこから、わたしの第二の青春が始まった」

*二〇〇八年八月十四日「希望は戦争」絶望感が生んだ逆説・足音聞こえませんかー戦後63年のニッポン 中、「北海道新聞」平成二十年八月十四日号

「本当は戦争なんてしたくない。しかし、絶望感から、そんな発言をせざるを得ない。『逆説』ですよ。」

「貧困から東北の農村で娘が売られることもあり、国民に『現状を変えねば』との思いが確かにあった。欧米の植民地支配からアジアを解放すること、『正義』だと私は信じていた。」

*二〇〇八年九月一日「一九四五年八月十五日のこと・特集〈忘れえぬあの一瞬〉」、『小説現代』第十六卷十二号

「これはわたしのための戒めでいいのだが、おもな産業都市は爆撃で焼野原となり、食べ物芋類と小魚と豆の煮物しかなく、戦犯という名の処刑者と戦死者と負傷者、原爆死傷者などを残して敗戦し、降伏した事実を、『耐え難きヲ耐え忍び難きヲ忍び以テ万世ノタメニ大平ヲ開カム』で済まし、どこにも敗戦とも降伏とも述べずに済ました儒教的倫理をほとんど自己嫌悪した。わたしだけでもいい、この場所から脱出したいとせつに願った。わたしはこれについて私恨はほとんどない。だがこれから脱却できなければアジア的な段階の地域住民の誰もが永続的に駄目な気がする。ヘーゲルのように欧米的な段階がいいなどと夢にも思ったことはないのだが。」

私だけの「世界遺産」とされた「ねずみホテル」の関連書誌として、一九九七年九月の「称名ホテルの一夜」(『想い出のホテル』Bunkamura刊所収)がある。魚津の飲み屋での話ついでに立山登山をすることになった経緯から、魚津から立山の称名小屋まで往復した路線を含むルートの詳細は

うかがえない。

二〇一二年の夏に、「現在「二〇〇七年九月」引用者注」の隆明の話では、言い出したのは、東工大研究室から来ていた鎌田実助助手。その提案に、隆明と、同期の竹内勝、中村実がのったという。立山までどういったのかの隆明の記憶は定かでないが、一行はまず魚津から富山に出て、「富山地方鉄道」(昭和十八年に県内の鉄道を統合・発足)に乗車したのだろう。約一時間で当時の登山口の駅、栗巣野駅に着く。(石関善次郎『吉本隆明の帰郷』思潮社刊、127頁)という道筋が明らかにされた。

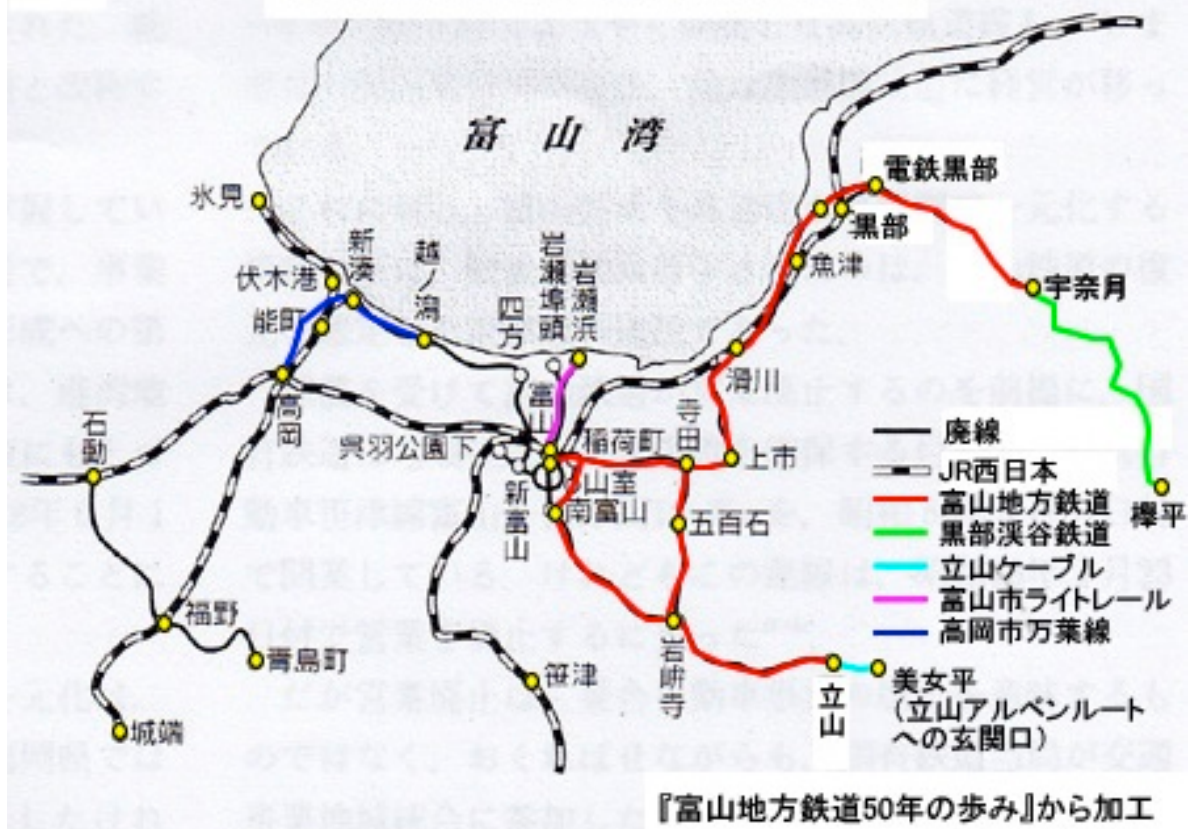
「一行」が寝泊まりしていた日本カーバイドの寮から、北陸本線の魚津駅と富山地方鉄道本線の新魚津駅もほぼ等距離のようだから、「一行はまず魚津から富山に出」ないで立山に向かう路線ルートもあったのだが。

富山地方鉄道が成立する七年前に「電鉄魚津」ー「魚津」(現・新魚津)が開通し、中間駅となっていた「電鉄魚津」が出発駅になったとは考えにくい。もし日本カーバイドにより近い新魚津駅から富山地方鉄道本線に乗ったとしたら、上市駅でスイッチバックして寺田駅で富山地方鉄道立山線に乗り換えることになり、北陸本線で「まず魚津から富山に出」て乗り換えた富山地方鉄道本線始発駅から寺田駅までの乗車経路はなかったことになる。魚津にやってきて数か月の「一行」の誰かがご存命で、立山への路線ルートを憶えておられるであろうか。(2012年9月13日)

参照「図2 富山地方鉄道成立時の富山県内鉄道路略図」

「富山地方鉄道の歴史(中川浩一の地方鉄道史10)(富山地方鉄道の歴史過程 鉄道ピクトリアル No642 1997/9) <http://ktymtskz.my.coocan.jp/kansai/toyama.htm>」
45

図2 富山地方鉄道成立時の富山県内鉄道略図



日暮らし通信：プレイバック（1／2）

吉田 恵吉

無題（90/02/17）

「C」が留守の週末なんてあったらどうか、とMacを立ち上げたいと思っています。Z君がコピーさせてくれたワープロソフトのテストを兼ねて入力を開始。変換のスピードの速さに驚いています。このZeroByWord（ソフトの名前）はいける、という感じです。入院中のCには関係のない話ですね。でも、紙と鉛筆でできそうにないことをしてくれそうなMacだから、こんなことをやり始めました。

Macの隣のDoDeCaHornではスタン・ゲッツのテナーが快調です。依頼テープのリプレイのB面です。小学生に聴かせるジャズ・テナーなんて、なんじやらホイと一瞬迷ったりしていたら、なんで村上春樹があんなにジャズやロックを引用するのか見当がついたような気がしました。

「はたぶん、ねるとん……」を見始めたころでしょう。明日の朝、テープと雇用願を届けてくれるなんて言っていました。

A面は予想どうりソニー・ロリンズ、ただし内容はウェイ・アウト・ウエスト”のB面の三曲です。ゲッツは迷ったすえ「フォーカス」からの四曲にしました。

ダビング後も「オペラ・ハウスのエラ・フィッツジェラルド」にまで手が伸びたり、一杯のつもりワイルド・ターキーが三杯になったりして？ジャズとは縁遠くなっていたはずなのに。隣りにCが居ないからか？

六週間の別居なんてお互いの結婚前の二十四年間と、二十八年間に比べ

たら短い、短い、なんていえませんか。死が二人を分かつとき、などと考えることはあっても、ケガで引き離されるなんて予想も立ちません、でしたね。

暖かい二月の土曜の午後、スキー日和というよりサイクリグ日和という感じに反して、若葉台の先生にお礼と支払を済ませ（図書館の本の借用を頼まれ）たり、夕食後は「週刊ベースボールマガジン」を買いに走られ（おかげで探し求めている『マッキントッシュバイブル』日本語版と『ロバート・メイプルソープ』写真集まで入手できてゴキゲンになれ）たりした。

まっくるしーと第三号 (90/02/18)

昨日に続いて、ワープロ・ソフトのテスト中……

それにしても今日は疲れてしまった。休日の講習会なんて二時間が精一杯。午後の二科目はほとんど寝ていた。昼食時間の買物と、休憩時間の結婚式のやらされショウの見物が唯一の息抜きだったね。講師の話がつまらない。『で見たローリー・アンダーソンのトーク・ノーマル』や昨年の長岡での『講座・吉本隆明農業論 Pt.2』みたいだったら、一日でも我慢できるのに。でも、Aが二時間もかけて作ってくれた夕食はうまくて、疲れも消えてしまった。

「ヒロセ・スポーツ」の姉さんは、なんでうちの客にケガが多いんだろう、お祓いしなきゃね、などと叫びながら、なんと、スエット・タイプのトレーナーをお見舞代わりに半額にしまった。この事故を話して儲けてしまった。新製品の発表前在庫処分だろうけど見立てを気に入ってくれるといいんだが。お店の親父さんも、お大事になんていつてくれてましたよ。

なんか、まるでパソコン通信気分（やってもいないのに）書き込んでいるみたいだ。今まで Mac 付属の簡易ワープロ TeachText しか知らなかつ

たから、この ZeroByWord の変換スピードは実に快適だ。MacPlus にこんな速度があるなんて知らなかったね。ベッドの中にポータブル・マックを（十万円くらいで）持ち込めたら、好きな時にフロッピー・ディスクを使ったスニーカー・ネットワークで言葉を交わしたり、ゲームも楽しめるのに！六週間も Mac とつきあえば「太刀打ちできるようになるかも」。

でもこの日本語ワープロは縦書きができないみたいようだ。詩には使えないね。前に、「まっくるしーと」第二号として、おまけソフトの旧版 Book (縦書き可能) で、八十年代に書いた十数編を私家版詩集として作ってみたけどあまりのひどさ（器も中味も）にあきれて、放り出してしまった。それで、八十八年の誕生日に作ったのが初号、昨日の通信が二号。そして、これが三号としました。幻に終った詩集のなかのひとつを「横書きで」読んでくれますか

風のあとさき

家中の窓を開け放つ
触ってくれていいんだよ
手垢で磨きあげた自転車のように
走りすぎていくんなら
記憶の渦の縁に沿って
みんなもではらってしまった

柔らかな風のなかの河原がいい
ゆらぐビルの街の谷間からの月見としゃれて
騒音にさらされる水の中
河口まで走れ思いつき
誰もいない空っぽの駐車場
すてられたウォークマンも唄ってる

光と闇が踊る

はじめての展望台はたまらない
飛び越す足が凄いのだ

言葉に頼っていいのだよ

持てるものなど少しもなく
つかまるところもないのなら

(1989/9)

まっくるしーと第四号 (90/02/19)

春一番が吹き荒れたあとのきさらぎ選挙も終って静まりかえった街に、ときおり名残の風が渦巻いていた。自民党の安定多数ということで、大衆は「現状維持」を選択したのだ。高かった投票率が野党第一党としての社会党の得票をてこいれたかたちになったが、これとて「現状維持」の枠を一步もでるものではない。「消費税」が象徴するアジアの一角の「現在化」革命はその一步を標したのだといえる。この十年、「中流意識」は経済社会的な主役を演じさせられているだけで、まだ物質的な豊かさを相対化するだけの内蔵を持てないでいる。わが大衆が、ほんとうの脳とほんとうの臓器を健やかに働かせて暮らせる日はまだ遠い。

わが家の影武者がいないと晩酌を分かちあいてにもこまって、夕食もさっさとすんでしまう。おふくろがバテないように、とねがうばかり。まだ月曜の夜だというのに、なんとなく家族全員調子がでないようだ。腰がつるくらい、よく寝て、食べて、しつかり回復なんてあるのだろうか。見舞金かき集めて病院抜けだして、パーアツと派手にやったらみんなノリがよくなるかも？

「スキャン画像略」

まっくるしーと第五号 (90/02/21)

今朝もでおくれた△が追いかけてきて「今ソ連や東ヨーロッパでやられていること、なんていうの？」と尋ねてきた。てっきりトンチ問答と思っただが、機知ある返答ができかねて「ソ連はペレストロイカ、他は民主化要求」と窮してしまった。お互い、通学・通勤途上なのに、駅に着くまでマジな話になったのだ。新聞・週刊に代表されるジャーナリズムの報道だけでは、どうも分からないことが多すぎる。ルーマニアのチャウシェスク大統領が孤児を徴兵した軍隊を私有していたこと自体が不可解なのに、その私兵をさし向けてデモ隊を殺させたとなると何おか言わんやである。その後、捕えられた大統領はといえば、納得のゆく裁判を受けた様子もなくあつさり殺されてしまった。中国の天安門広場の出来事とは毛色の違った得たいのしれないイメージが東欧の一角から繰り出されているというのに、いままでのところ、どこからも説得力のあるフォローがなされていない。『新潮』三月号誌上での、西武のボス辻井喬との対談における吉本隆明の発言も事態の核心までは衝いていなかった。

戦後四十数年間の大衆の生活が「国家社会主義圏」でとくに遅れをとったことのツケをゴルバチョフに代表される為政者たちが支払わされているんだといってみたって、娘に通じる訳はない。モスクワにパソコンを持っている人は十人といない、ポーランドじゃ私的コピー機なんて夢だった、等というところ、「ウツソー」とはねかえされる。両機器とも自宅でお好み次第で使っている当人にしてみれば無理もないが、一方では、母親がパートタイマーの分際でアキレス腱を切ると即刻クビになってしまう「社会国家主義圏」の現実も受けとめざるをえない。フルタイマーの父親にしたって家族全員が週休二日制を享受するだけの賃金を獲得していない。あるがままの自分なんてチャンチャラおかしくなってしまった今、本来の自分にも、役割としての自分にもゆきあえず、ただやみくもにおいたてられるのが関の山なのだ。

なんにもなりたくなかったのに、何かをさせられ、生きさせられているという点においては（たぶん）共有するところがある二人だったから、これから平凡を目立たないように、積み重ねるいいがない。観念して、つかの間の静養をつくりだして、愉しんでおくこと。

「脱」主婦、「脱」パート、「脱」母親、「脱」妻、「脱」女、「脱」思いつくもの何でもかんでも、しつかり味わっておいってください。

まっくるしーと第六号（90/02/21）

あなたがスポーツをすることができないのは、ほんとうに残念に思います。それこそ、あなたにぜひ必要なことでしょ。ご両親になつとくしていただけるよう、一そう努力してごらんなさい。せめて、山々をたのしく歩きまわることだけでも禁止されないようにねがっています。山へ行ったら、わたしのかわりに山によろしく言ってください。

工場にきて、わたしも気がついたことですが、体力や、敏捷さや、目のつけどころの確かさにおいて欠けた点があると何もかもがたがたとくずれてしまいそうな、うちひしがれた気持ちになります。この点においては、あわれなことに、二十歳より前に身につけておかなかったため、今となってはもうなにひとつ取り返しがつきません。あなたはできるだけ、筋肉や、手や目をきたえておいってください。このことはどんなに言っても、言いすぎはないはず。こういう訓練をしておかないと、自分にはどこか不完全なところがあるような気がするものです。（シモーヌ・ヴェイユ「ある女生徒への手紙」1935年）

スポーツ少年団のバドミントンで子供たちの相手をはじめてから、こういう言葉にであって思わず内心で、唸ったことがあった。今まで、スポーツについて語られた言葉としては、最上の部類に入るのではないかと思っ

ていた。五年前と、先週の日曜と、二度のスポーツ指導者講習会で幾人かの講師の話を聴いたが、通り一遍で過ぎ行く話ばかりだった。まったくスポーツにかかわりないような人が、えてして名言を吐いている。

手足を動かすことが機敏であるか不器用であるか、身体が動作によって体得するかしないかは、〈知〉の系列とはまったく異う別の秩序や系列を構成できるものだ。心は屈辱を感じなくても、身体がそれを感じ、心がそれに追従することはありうる。これもまたヴェイユがはじめて体認したことだった。知識が冒険を忌むのに、肉体は冒険家であることも、逆に知識は冒険家であるのに、肉体は臆病で冒険を忌むということも、一個の人間の中では起こりうる。

ヴェイユはこのことをはじめて発見した。ヴェイユの女生徒への手紙は、とてもいいものだ。スポーツをして、機敏な身のこなし「傍線部傍点」や、筋肉の動きや、体力を獲得すべきだ。若い男女たちよ。それで健全で明るくなったり、他人を残酷に扱ったり、圧伏したりするためではなくて、そんなことはほんとに身体の不器用さや、体力の弱さにくらべて、誇るべきものでも何でもないことを体得するためにだ。またもし若い男女たちよ。じぶんが学生だったら、また生涯の生活が学生の延長だと思っているのなら、知識を飽くことなく獲得すべきだ。それで他人や、知的不器用や知的でない大衆を圧伏したり、侮蔑したりするためではなく、知識は〈寛〉とおなじようにあっても決して耻ではないが、誇るべきほどのものではないことを、ほんとに体得するためにだ。（吉本隆明「シモーヌ・ヴェイユについてのメモ」1986年）

これまでは違って、一人で校下のバドミントン・クラブの練習に出かけたらしいと思うところがあって引用の多い通信になってしまった。最小の筋肉の動きと、強度の神経の緊張を強いられつつある端末作業に直面しつつあるわれわれにとって、スポーツはまた新たな局面を展開してきて

いる。ということを描いて、裏面にはみだしてしまったが、終わりとして。まったく一方通行の通信ですが、もし言いたいことがあったら余白に書いて返してください。

まっくるしーと第七号 (90/02/22)

「スキヤン画像略」

帰りがけに医薬大の病院の花屋さんを覗いた時の気持ちをイラストにしました。このワープロ・ソフトは絵も文字と同じように扱えそうです。何号か前にブルース・ブラザースのイラストを入れようとしたのですが、失敗しました。

ベッドサイドにいつも花や絵があったら、同室者のいびきなんかも緩和されるのにおもったんですが、このような代物でガマンしてください。

昨日の夜の富山テレビで、チャウシェスクの処刑にまつわる報道番組をオン・エアしていたんだけど、疲れて寝てしまって見損ないました。たぶん、「文藝春秋」三月号のルーマニア関係の記事のビデオ版といった中味ではなかったか、と見当をつけているんですが、チョット残念でした。雑誌の記事はコピーできたら見せてあげます。辻井、吉本の対談コピーも一緒に読めばいいかもしれませんね。

読む気にならないで、持って帰った文庫本は、日記体のリズムとでもいうような文体ですね。これじゃ病室で読めなくてアツタリマエダノクラッカーを齧るようなものです。スポーツでも、読み物でも、映画（ビデオ）でも、つかの間の脱出感覚、我を忘れさせてくれるものが、おいしくて、カッコいいと思います。そんな《現在》的な評価の基準をクリアしている本を届けてあげたい。

食後に、Aと久しぶりにテトリスをやりました。二人ともまったくだめだめおよびじゃない、のワンパターンでした。つかずはなれずといった、微妙なレベルでの反復が好結果をもたらす。パソコン・ゲームの教訓ここにあり。お粗末さまでした。

まっくるしーと第八号 (90/02/24)

二月の雨の狂い咲き、夜を濡らしてなまめかし、春二番の後のやけに暖かい毎日をくるむように週末の雨が降る。凍える思いで待った通勤バス、弾む感触の新雪を舞い上げたゲレンデ。なんと落差のある如月。

テトリスに誘っても、一度しか乗ってこないくらいAはがんばっている。三月から大学受験ラジオ講座にのりかえるといって予約を済ませ、「高校コース」を止めてしまった。軽くて中味の重そうなTimeも届きはじめてパソコンどころじゃないといった顔をしている。たった一回でもカールく一万点をクリアしてしまい、中味で勝負といったところなんだろう。五百点以上の差をつけられてしまった。今夜は、午前様にならないように寝るらしい。孫に負けないくらい、おふくろもやってくれています。

鍋物をつつきながらの夕食の話題に、二人が離婚してこんなだったかどうかなど、今どきゴッゴで戯れました。学校で観てきた液晶テレビ画面の内蔵の映像からウンコ話になり、若葉台の先生用に持ち帰った「人体解剖カラーアトラス」を眺めて、食後は幕となりました。

「イラスト略」

きょうはスーパーパーペイントからの、イラストのペーパーストがうまくいきました。昨日駄目だったのが、嘘みたい。マックデツクルンルンシートの

リズムで踊っているのは、ダン・マックロイドとジョン・ブラースでした？

まっくるしーと第九号 (90/02/25)

二月の終わりを降り込めるような小雨が糸を紡ぐ日曜、姉さん一家が訪ねてくれて賑やかでした。お昼は松の寿司（モチ、出前だけ美味かった）、晩は差し入れの煮物があつたりして、おふくろは大助かり。みんなで「観戦した横浜国際女子駅伝」では、大笑い。第四区間だったか、首位に肉薄していた中国選手のアラジヤがランニング・シャツの上にはみだしてスピードが鈍ったり、四区の松野明美のトップをひきついだ大和撫子はハイレグにすればいいものを、ランニング・パンツの裾にパンティを覗かせて力走していた。とどめは五区の中継点のソ連のリレー。トップの日本にくっつくようにとびこんだのに、タスキを渡す第五走者がいない。キョロキョロする傍らで、あせつてたたらを踏む片方の足首からトレーナーを脱がせようと役員が引っ張っていた。十秒以上のロス・タイムだったね。駅伝役員の不手際だったんだろうけど、ソ連のアンカーのがんばりからみて、あのハプニングがなかったら日本女子選抜チームの初優勝は危うかった。それにしても、日本の女子ランナーの肢体は良くなったものだ。雨中を疾走する姿に色気さえ漂う。

まさか毎晩歯をくいしばって机に向かっている訳でもないだろうに、Aに親不知が生えてきたようだ。昨晩からじゃんじゃんかってくる数学コールにすら対応したり、ひよつとして知恵も生えてきたらいいのに。松苗あけみ（先生）の「山田君と佐藤さんハイスクール編」みたいなかわいげを秘めた高校生活とも縁があるのだろうか。少女マンガがクリアしてしまった世界なんて、中年女性たちはどこに置いてきてしまったんだろう。がさつだけが化粧となつて、成熟の魅力、珠玉の気柄を秘めた肢体は、たとえば大島弓子の漫画のなかにというわけだ。男たちはといえば、あいかわらずアジア的な感性のニヒリズムの泥沼であがいているだけなのかもしれない。少年漫画のつまらなさがクリアされないわけだ。

「スキャン画像略」

まっくるしーと第十号 (90/02/26)

あゆちゃんの簡易ソバージュ、なんて学校で呼ばれるくらい、おふくろの三つ編みもうまくなつてきています。高二最後の期末テストも好スタートを切ったようで、今夜はしきりに漢字の読みを聞きました。察するところ、漱石の「こころ」あたりがテスト範囲みたいだ。「お嬢さん」をめぐる「私」と「私」とのきつい人間関係の原型を授業でやってテストするなんて凄いね。いまだきの高校生は、どんな消化のしかたを見せているのかな。とくに「K」の絶対的な受身の姿勢なんかを。想像もつかない。にっちもさっちもいかない壁を前にして、おのれの影を踏むようにして、人間はひとつの放棄の構造をくぐりぬけるとはどういうことか。人倫とは何かという、きついけれど、それゆえの問いに値する答えを探し求めて、漱石はバツタリ倒れてしまった。以来、漱石的な主題の継承は、どんなふうに究められてきているのだろう。きっと教える先生だって、大変だと思う。

「スキャン画像略」

病室を通過してゆく入居者だけが病んでいるわけではない。（現在）という世界自体が、病なのだ。症状の露出の度合はますます激しくなつてきている。視える人と、視えない人、ふた色の存在がいっそう色濃くなつてきている。そして、対症療法を説く言葉は巷に溢れかえり、根源的な治癒の言葉を探すものは、命が現在と遭遇する時空にいたる地図をまず作らねばなるまい。（現在）の「漱石」はいま、どこで、何を書いているのか？

休めるときには、テッテ的に休んでおくこと！

まっくる通信 第十一号 (90/02/27)

「イラスト」90Jan.-Jun. カレンダー略

第十一号から装いも新たに、カレンダーをお届けします。たったこれだけですが、糊もはさみも鉛筆も定規も、もちろんコピー機も使っています。狭い机の上を、使うようにっては、パソコン・ソフトがけっこう広がります。

もうすぐ三月、風邪などひかないよう、リハビリもしつかりネ！

まっくる通信 第十二号 (90/02/28)

やっと陽射しののぞいた二月最後の半日、マツイでEの支払を済ませてから、新富山から市電で西町まで来なかったことをAともども惜しみました。二人とも市内の乗り物では一番気に入っていることを中旬以来再確認し、日中に病院から帰るとき視点の置き所にしようと決めていたのに。小金を取り戻し損なうていささかがっかりしていたのかもしれない。思いがけず富山市に住むようになって十七年にもなるというのに、いまだに愛着の場所に出逢えない。家族が生活を営んでおり、稼ぎ場所があるところという以上の意味は希薄だ。自転車でいったことのある、岩瀬、水橋あたりの民家のたたずまいが記憶に残っている。

先々週の土曜に買ったロバート・メイプルソープの写真集以外に、たいした映像には出逢っていない。ブロンズのような黒人像、トルソのような女性像、生命を抜き取ったばかりの切り花、そして自画像。遠いエジプト期の側面絵画を現在の都市に蘇らせた手応え。マーク・コスタビ画集以後、最もおりをみて開いている。

「スキャン画像略」

先月の書評紙でその死を知って以来、ドコカココロノカタスミデコロガシテイタ、菅谷規矩雄への追悼文や、弔辞を雑誌で立ち読みした。遠峰の時のような納得のゆくイメージにはほど遠い。詩人としての菅谷は、日本のボビー・マクファアリンだったといえます。実験的な到達点の凄さが先に立って、愛聴盤にはなりません。それにしても死者を前にしてはなむけの言葉をとどかせるときの、吉本隆明のたたずまいには、いつもながら打たれます。

十二号にはメモ・カレンダーのおまけがつきます。ご利用ください。

まっくる通信 第十三号 (90/03/01)

音を出してダビングしたら、と言い残して下へ降りたAは、居間のテーブルでテスト勉強。愛用のシャーペンで書き進む時の、あのコツコツ音立てるリズムが気に入っているのだ。本番のときも、まわりがプレッシャーになるくらい、ひときわ冴えたリズムに乗っているのだろうか。風邪気味の期末中休みも、マリエのスギマサに出かけ（注文の糸はなかったようだ）、貯金をして帰ったり、息抜きリズムの一日でやっている。おかげでこちらも、オーティスが楽しめる。いま The Match Game にノリノリだ。マイク・タイソンもこんなハートをもったチャンプだったら、ダグラスなんぞに……、わかる奴にしか分らない。ここで、曲目紹介。テープA面 1. You Don't Miss Your Warter 2. Satisfaction 3. Ole Man Trouble 4. Down in the Valley 5. I Can't Turn You Loose 6. Just One More Day 7. Papa's Got a Brand New Bag 8. Good to Me' 9. 11th B 面 1. Merry Christmas Baby 2. White Christmas 3. Love Man 4. Free Me 5. Look at the Girl 6. The Match Game 7. Tell the Truth 8. (Sittin' on) The Dock of the Bay 以上文句なしの十六曲。ウォーレン・ジボンやルー・リードのおじさんパワー、そしてジョン・ルーリーのトカゲ・ジャズなどに、躍

らせられたとはいえ、身丈にびったりきたのが昨年の長岡の講座吉本ライブと今年になってやつとEでライブ化されたローリー姉御の『トーク・ノーマル』だけというのは、いかにも淋しい。ピュアな泣きのパンチにいまひとつ、肉がついてこないブルーハーツ、都はるみの復活宣言にしたって、欠けた日本の御三家の一人の美空ひばりの穴埋め以上は望めない。のこる矢野顕子、中島みゆきも定食フルコースにちかい。ユーミンはゲレンデのBGMどまり。入院BGMカセット第二弾は、リクエストでエラカオーティスか？と踏んでいたが、見事あたり！吉本隆明版・YOU、ライブ・テープと抱き合わせて届けよう。

「イラスト略」

我が家に復帰するころは春たけなわ、せいぜい足もとのオシャレを楽しもう。ところでこのイラストはどんな映画だったか当ててごらん。アメリカにはなぜ少女漫画がないのか。ジョン・ヒューズの作品に代表される素敵な青春物がマンガ。

まっくる通信 第十四号 (90/03/02)

ここ数年三月ともなれば、やれ退職退官記念と称したセレモニーが、すつかり定着してしまった。心あるものが、ないないで集まって、やりたいうようにやれば済むことではないか。形式や型だけが先行する、あの忌まわしいアジア的な習性で塗りこめられたなかで、いったいどんな面をして飲み食いかつ喋っていられよう。早々に抜けだして病院に立ち寄ってホッととした。抑圧を他へ転化することではけ口を見出しているのがアジア的な社会の悪しき構図なのだが、いったん組織の中に閉じられたとなると、逆にその習性が式典や行事における式主義の一点張りとなって勢いづく。いずこも同じ、暮れ行くアジアの年度末の官僚儀式。

期末テストの最終二科目の一つに苦手の基礎解析を残して、は不景気な

ため息を漏らしている。満点を目指して今朝まで頑張った日本史も、夕食後二人で問題をおさらいした感じでは、七割五分の出来だろう。名前だけでひもといたこともない原典についてのテストじゃあやふやなのがあたりまえ。風邪気味の体調でよくもちこたえたほうだ。もともと試験期間を、全力で完投できるタイプじゃないし、どこかでヘバリがでる。そして、息つく間もなく部活と、とりだめしたラジオ講座のテープが待っている週末のひな祭り。

「イラスト略」

この手料理とうまい酒に与れないのがチョット残念。おふくろのおてなみに、乞う御期待というところです。

「イラスト略」

淋しい我が家のお雛様

帰りも待たず

一年先の天袋

まっくる通信 第十五号 (90/03/03)

冷やした梅雨もどきの雨模様を温めるように、雛段に、床の間に灯りをともし、はのセブンティーンの節句を祝いました。もちろん夜のバドミントンにはパス。おふくろが腕に撚りをかけた「ちらし寿司」と、蛤のお吸い物、そして生蛸の「お刺身」までついていた。久しぶりのお銚子が一本。デザートはもちろんパウンド・ハウスのケーキ。五個も並べば、今夜の主賓も文句なし。

ケーキ屋に入ろうとした時、停車中のバンの運転席から声がした。「大虎」あたりで一杯ひっかけようとしていた「直さん」だった。呑まないか

ら、と失礼しようとなると、久し振りだから話しながら送らせると待っていてくれた。世間話をしながら草島線にでたあたりで、いま連れ合いと別居中でタイヘンなんだ、と言ってみた。かえす言葉もない、オドロキの一瞬が流れた。雨脚が強くなつた家の前で僕を下ろすと、オダイジニの声を残してユーターンしていった。レンタル・ビデオや洗濯物で膨らんだバッグや大事なケーキを抱えていた折から、とても助かった一幕でした。赤ちやうちゃんへとリターンしてくれただろうか？

知人との遭遇もひさしぶりだったが、娘と一緒のビデオ（映画）も何週間ぶりだったろう！いかにも求心的な邦題の「[TV大捜査線 狼たちの街](#)」よりも拡散的な原題の「[To Live and Die in L.A.](#)」がピッタリくる。相棒の復讐の鬼と化して、画家くずれの偽札作りを追い求めるシークレット・サービスの活劇という筋立てにからんで展開されるいくつかの見せ場、そのどれもこれもがどんだんどうでもよくなってしまふという、とにかくたみかけて見せることだけに徹して後味になんにも残らないという、小粒だが、ツボをおさえ出来映えだった。反対車線を逆行して逃げるカーチェイスのシーンがこれほど効果を發揮した映画は他に知らない。

「イラスト略」

ビデオやレコードも元氣な復帰を待っている。ミルूमも磨いておきます。

まっくる通信 第十六号 (90/03/04)

マラソン中継画面の名古屋市内の陽光に誘われたように、午後から早春の陽射しがのぞいたので、1990名古屋国際女子マラソンのゴールを観ずに、ペダルを踏んで昨日の運動不足を解消してきた。「〇キロ手前でリサ・マーチンがリタイアしたとき、今大会の魅力は半減してしまった。かつてクリスチャンセンがパワーを持ち込んだ女子マラソン界に、今度はフアッ

ションを引き入れたのがリサ・マーチンだった。大会の目玉というべき走飾兼備のランナーがブラウン管から消えたとき、映像の焦点はフアッション性から京セラや資生堂といった企業名のはいったゼッケンを胸にして走るフツの女の子の魅力に溢れた日本選手対外国選手という構図に移ってしまっていた。市内じゃ最も品揃えに魅力がある「Books なかだ」本店ですっかり時間をつぶしてしまつて、帰りはいささか風が身にしてみた。収穫の一部を予告するイラスト

「イラスト略」

読み物では退屈させません！

「イラスト略」

乞う御期待。

夕食はマの手作り！ハートまで満腹。食べられなくてザンネンですね。

[「日暮らし通信：プレイバックⅡ/2Ⅱ」](#)に続く

[「高屋敷の十字路」](#)

「日暮らし通信：プレイバックⅡ/2Ⅱ」 kyoshi@tym.fitweb.or.jp ファイル作成：2012. 09. 22 更新：2012. 10. 08

吉田 恵吉

まっくる通信 第十七号（90/03/05）

三月からはじめた、ラジオ講座も二日坊主。それもタイマー録音しててなんだから。タイムスリップしたようなテーマ曲を三回も聴かせてくれた間抜けさ加減には笑ってしまった。メカに強いが二回もカラ振りするなんて！朝は弱いしこれからいったいどうなるのでしょうか。塾へ行くより安上がりだからなんて始めた心意気。ダメッテナガメテイテヤロウ。それにしても二十数年前と同じ演奏、受験地獄だけは変わっていない。病院でまとめて「べっきよつうしん」（？）を読ませてもらった後、娘のことがまだ書き足りないなんてぼやいていた。問題児じゃなし、いまのところ素晴らしいフツのフツチャンだ。懐をできるだけ深く広くして、だまってみてやるだけ、それ以上のことはとてもじゃないが、出来そうにない。

別棟二階を掃除してて、今更ながら本が多すぎると思った。棄てる整理を始めた読み始めたり、コピーをとったりでちっとも進まない。「ハー ドカバー本図略」こんなのだんだん読む気がしなくなった。軽くて、面白くて、読みやすいのがどうも残りそうだ。ビデオのコレクションに似ていなくもない。いまは「パラパラ／ペラペラ図略」こんな感じで読めるものもいい。かなり前の「マリ・クレール」に面白い本の分類法が乗っていた。

本には理解もできず、何の役に立つかわからないのに、そのことで役に立つ本がある。

また逆にとってもよく理解でき、役立ちそうなのがあちこちにばら撒かれているのに、何の役にも立たない本がある。

また本は中味で読みそうになつたらすぐに引き返して、そんなやり方で読

んだら駄目だと、たえず突き崩し茶々をいれていることで役立つ本もある。

人それぞれ読み型があつていい訳だけど、本を手にするときどれかのパターンにはまっている。

ホンのすこしのつまらないホンのホンのほなしでした。

まっくる通信 第十八号（90/03/06）

仕事をおえてのベッドサイド・カンバセーションもすっかり日課になってしまつて七時を回つて県道へでてもなく、いつものバスに乗り損ねてしまった。遅れを覚悟したところで二番手に拾われ、アツという間に駅前に運んでくれた。横断歩道で、嬉しいかな、に呼び止められた。すぐそのチックタックで用のシャンプーを買つて、いつものバスに並んで座った。れいのチョコレートを買つて破った。一緒のときは、耳栓をして、着いたら起こしてだったのが、きようはずつと話しながら帰った。両親が別居中？の娘にしてみたらさしずめ父さんを一人じめ、といった気分なのだろう。今はシャワーをしていて、あのイマ風タオルのプレゼントを味わっているようだが毎晩かあさんがいなくて、筑波の科学万博にとうさんと二人でいったときの気分の再現にちかいのかもしれない。

毛利の伯父さん、いい日和に見送られてよかった。口数も少ないだけに内面ではいろいろあつたんだろうけど、善い往生を遂げられたとおもう。

一昨年から、身近い人、遠い人、忘れていた人、気に懸かつていた人、ボツリボツリと死んでいく。徐々に自分もさしかかって来ているんだな、ということか。何事でも、身を乗りだしてやる時期は過ぎたというか、引き気味で手を抜かない。ひかえめということじゃなく、これまで以上に、抜いた力を込めねば中高年を狂わずに渡つてはいけない。臓器を鍛えて、自在に抜けられる気力、体力、精神力、視力を養い続けられるかが課題

だ。

往路より帰路、登り際より降り際、その微妙な難しさを、たとえば菅谷規矩雄の死に想ってしまふ。六十年代、孤立と断絶の時代に大学教師を降りて、どこかで着地に誤ったのではなかったか。風俗や事件に憑いた文体をときおり目にするようになってからは熱心な読者じゃなかったが。シンポジウムの講演者の太鼓持ちみたいな振る舞いを本で知った時には、かつての息せききった文体の、音数律の論者はどこへ？と疑ってしまった。

「スキヤン画像略」

『バナナ・フィッシュ』第三卷「オレはクズどもに軽蔑されたって痛くもかゆくもねえよ」アッシュの台詞

まっくる通信 第十九号 (90/03/07)

院内では毎日が冬休み、いまや春休みだろうけど、外はめっきり冷えて雪さえちらついた。補習を削っての体育館での卒業式の予行、そして明日の本番、 Δ は風邪よけに、長袖のシャツを着込み、カイロを二つも携えて登校している。いかにも早春といった日和が一日たりとももない崩れ模様の毎日が続く。売店のオバサンの話だと、傘がよくでるそうだ。

職場じゃチラホラ異動の噂話のハナ咲く季節。人事囃子の音すれど、古漬け匂う倉庫の片隅。いくらヘッドを取り替えたった、ジャムるプリンターの垂れ流し。ボスはうわ滑りし、手下は我閑せず。アジア塗りの官製雛が描く人事絵巻。変わりばえせず、もみ手するだけの弥生の蠅。昇進リボンがしおりがわり。職員録にへばりつく。

「マルクス・ブラザーズのイラスト略」

目先のこともおさえながら、起源を尋ねる。弥生より縄文、アジア的よ

りもつとさかのぼって、アフリカの時代まで視野に繰り込んで、〈現在〉の切り口、入口と出口をイメージする。ビジョンは力、これからは構想力がものをいう。金のあるところイメージに乏しく、イメージがあっても金はない。

賢治が童話の世界で骨格を示してみせた。人口の自然、人口の都市の具體的な端緒はどこに？

秋の関西旅行、できたら西武が造った人口都市、ツカシンへも行こう。

まっくる通信 第二十号 (90/03/08)

門扉の外に出た朝、二人とも感嘆符！！になってしまった。早春の淡雪、名残の雪景色では尽せない、ありふれ見慣れた高屋敷界限。この頃めっきり空いてきた通勤(学)バスの窓の外をいつも以上に眺め、総曲輪で降りた Δ は花屋で友だちと待ち合わせ。まず卒業生に贈る花束の幾つかの運び人が今朝の勤めなのだ。弦奏では冷たくて乾きすぎた指がボジションを滑り外してトチ狂うんじゃないかと心配していた。まだ式の余韻が漂う校舎外で、花束やテープに小雪が舞う。出番となつてここぞと盛り上げる管奏グループ、紫色になった唇はマウスピースに凍りついて離れない。ひび割れて血さえにじむ。先輩に贈る花束もままならず、想いだけが吹きつる。イエスタデイに至つてこの上なくグルーヴィに仕上げてしまった弦奏グループはまってきましたの、お別れセレモニー。これからの活躍祈ってます、なんていいながら、嫌な先輩が失せてバンザイ！だもんね。

「川原泉『笑う大天使』のイラスト略」

ここで、ハヤシマリコにも劣らぬニュースを一発。あの61センターちゃんに彼氏ができたんだって。ヴァレンティンの成果か、春への珍事か。これで彼女のあの性格が変わりうるかも。そうなりやイーネー！

まっくる通信 第二十一号 (90/03/10)

二十三時も回ってから二人とも二階にやってきた。今日は本当によく遊

んだ。八時十分にAを起こし、二十六分のバスでシネマ2に駆けつけたらナント上映は十時十分からだった。寝ぼけて新聞を見間違えていたのだ。

笑っている朝日を避けるように喫茶白樺で朝食をとった。朝から外食なんてリッチね、娘はやっぱり父のミステークを笑いで拭き取る。バナナ・ジュース、コーヒー、ミックスサンドそして新聞三種に写真週刊誌二種で一時間十分を潰した。

映画を観てからの遅い昼食は、予定とは違って、西武の八階で春陽に映える北アルプスのパノラマに対面しながら寛いだ。オシャレに決めて映画の後の上気した面持ちを傍らに、冷えずいていない中瓶が午後のひと時を潤す。満ち足りてエスカレーターで降り始める。スーツ買ったら、かあさんも喜ぶよ。紳士もの売り場は目もくれず通過、婦人ものをぶらぶら見る。ソックス安いよ、ウレシイ買っているの。三足千円。ヴァレンティンのお返し。ついでに同じ階で義理チョコへのお返しもバッチリ決めた。

「イラスト略」

イラストとは関係ないけど、本命の映画、ワン公物の方は年末に観た「ムー」の二番煎じ。なにせ小錦ばりのブス犬がよだれをはねとばして頑張るデカ物。トム・ハンクスが主人公ときちやだいたい予想がつくでしょう。子供がママを舞台に縮んで伸びる「ミクロ・キッズ」は小粒ながらバッチリ九十分をハイにしてくれた。とても監督第一作とは思えない出来だ。あの感動ものの「隣りのトトロ」の飛行シーンに負けないことを、アニメじゃなく蜜蜂を使ったママの実写であつさりやつてのけてくれる。金にいとめをつけないアメリカ映画の実力といえそれまでだが、出演者はB級、ただしあのエディスン・カーター役で売った俳優は今回も冴えていた。西行を想わせる月夜にも誘われて、昨夜からビデオをも含めて四本も娘と楽しんだ。そしてB.H.も。

まっくる通信 第二十二号 (90/03/11)

日頃のうつとうしさを忘れさせんばかりの週末の日和もあと数時間で終わり。好天気のおかげで裏の雪垣も片付き、ペダル散歩を兼ねたビデオ・レンタルショップ通いも数回に及んだ。何本観たってビデオ・テープは風呂敷みたいになってこちらの感性を包んでくるようなことはない。そこが昔のめりこんだジャズなんかと違う。グルグル回るだけのペラペラ加減が暇つぶしピッタシなのだ。選択の基準らしきものは一、二時間をそれなりに見せてくれるか、ということ以外に見当たらない。だから、三本千円のレンタルにまとめるのに困ったりする。娘の好みを反映させたり、ミュージック・ビデオを混ぜたりして机に向かう時間を奪ってしまった。ノスタルジックな冒険家物「ハイ・ロード」を、ハードボイルド作家物に置き換えたようなトム・セレック主演の「彼女のアリバイ」(ハッピーエンドに流れるランディ・ニューマンが、「潮風のいたずら」や「メジャーリーグ」並みにキメている)、スピルバーグの六十年代ビートルズ・グラフィティ「抱きしめたい」、E.T.の「ファミリー・タイズ」2、そしてブルーハーツのビデオクリップ(20分物)などを二人で楽しんだ。

映画館にしろ、我が家のAV室にしろ、作り手に忘れてもらって困るのは、まず観客を百分あまり退屈させないということだ。「ベルリン天使の詩」も、「ゆきゆきて、神軍」も見事に失格していた。久しぶりの「ブル・ハーツ」は相変わらず、マイナーのよさにとどまるものだった。あれじゃ中島みゆきの弟分といった域を離脱出来ない。いずれの世界であれ、メジャーになりおせることはまっこと、タイヘンなのだ。

一人オタクして観た「死霊のしたたり2」の後半のマクリはまことに痛快、休日の午後に我を忘れて無意識がオドッタ。宮崎勤効果の為か、劇場公開は無かったらしいが、ビデオになってよかったというシロモノ。ひと昔前のゾンビ物をひっくり返しちやつて、いまやパーツと化したバラバラ肢体がギンギンに暴れまわってくれる。これぞ、無意識の噴出といわんばかりに。

「イラスト略」

養生も半ば、アセルナ！

まっくる通信 第二十三号 (90/03/12)

まっすぐなんて歩けネエ、息をつくのがやつと。ミソもクソももってゆきやがれ、コノヤロー。ドエライ荒れ模様が悪態をつきながら週明けの職場に辿りつく。春を歩き過ぎた昨日とは、うってかわって急転直下のドンデン返し。職域、地域、国家のレベル、様々な層いろいろな場面での豹変ぶりになら、天気図の基本構造さえおさえておけば対応のしようもあるうかというもの。それにしても今朝の西の空から迫ってくる雲行きは不気味だったぜ。ステイブ・キングの『霧』なら何度でも読めるが、あんな空にはめったにおめにかかれるもんじゃねえ。この道何十年の百姓もタマゲルはずだ。

吹きっさらしのわが暮らし向き。生きることが苦痛でないなら、すこやかに暮らせるなら、誰がおもい煩ったりするもんか。

生活とは隅から隅まで判りきったことの繰返しからはじまって、いつのまにか不気味な物と心の配置が変わってしまう領域ではないか。誰にも気付かれぬうちにすべての判りきったことが不可解なものに変わってしまうかもしれない。その魔的な意味は決して歴史の表層に浮かび出ることはないとしても、歴史はそこから強烈な輻射を受けている。微かに有るか無きかに変えられてゆく生活の仕組みの影響を無視することは命とりになるかもしれない。その変化が理念を規制しないなどとたかをくくった理念がどうなりつつあるかはよく知られている。あるときふと変貌して不気味なものになっている日常性の領域がありうることを詩が指している。(修辭的な現在」吉本隆明)

一篇の詩なくして生きることが可能かと問いかける、熱い想いを秘めた一冊。

「松岡祥男『アジアの終焉』のイラスト略」ハートにきたぜ。

まっくる通信 第二十四号 (90/03/13)

寒さの中におちついた夜を感じながらの帰宅。△は夕ご飯を待ちながら△を見ていた。春のスペシャルと称してコマ切れにしたアニメの過去番組。冬枯れのテレビ局は、豊かな達成を残しているテレビ・アニメの回顧篇の一本さえ構成できないのか。なんちやって、冬場はほとんど見なかったが。アニメは娘の成長に綾なす回路から、少女漫画はつれあいとの余剰の回路から、時には双方が錯綜して、確かな手応えを俺の中に残してきている。

春三月、とくに高野文子なんか手にすると、極上のウエストコースト・ジャズでもあっちへいつてしまう。

「『ボビー&ハーシー』イラスト略」

父親はお尻で、娘っこは膝で、そしてこのたび母親が足首で、親子三人それぞれ〈身体障害〉を体験してしまった。どんな現実を渡ってゆくにせよ、生きそびれるように、自分にとって自分の、身体が〈障害〉であったり、精神が〈薄弱〉であったりすることから免れようがない。ここんところといかに折り合いをつけながらやっていくのか。これが実際のアポリアなのだ。ここをまともにくぐれんもんは、しよせん何事にも到達できそうにない。

まっこと、ゼツボー的な距離感しかない。カッコいいも、わるいもあつ

たもんじやない。そういう台詞をのたまうレベルにも届きようがない、危うさだけが唯一の取り柄でしかない。

ワープロソフト ZeroByWord を使い込むうち、ゆきあたりばったりで何でも書いてしまいうさだ。こんな粗末なものでも、やってみればわかるが「書く」ことはほんとに恥ずかしい。いろんな引用だけで埋め尽くして自分を消し去って、存在だけで触れられたら最高なんだが。根っからがイイカゲン、機に応ずる蓄積はおろか、語れるものもちあわせていない。テツテ的に意味を抜き去って、リー・コニツやウオン・マーシュの全盛期みたいに、言葉を置くことができれば、自信を持って渡せるのにナー、なんていつてるうちに頁がかわってしまった。引用でやるぞエー。

ひとつは消極的な条件で、自分が役割としている場所というのは危ないぜ、ということとにかくまずわかるということです。つまり俺のいる場所が間違っていないと思ってる人はたぶんたいいて間違っていると思います。だから、自分のいる場所はどうも危うくなってきたぜ、と考えることが、まず、かつこよさということに移行する消極的な条件のような気がします。

もうひとつは積極的な条件です。それは何かというと、本来的な場所はここだということを、直観的にかあるいは論理的にか感覚的にかわかりませんが、その場所を自分なりにつかむという課題を自分が果たしつつけることです。

この二つの条件を兼ね具えていたら、その作品なり、人物なりは、かつこいいのだということになるのではないのでしょうか。(吉本隆明講演「岡田有希子の死あるいはカッコいいとは何か」、『鳩よ!』4(7)通号 32, 1986. 07)

まっくる通信 第二十五号 (90/03/14)

今朝からの新聞・ラジオのニュースは、近くは「公務員給与の遅配必死」遠くは「ソ連のゴルバチョフ大統領誕生」ばかりかし。こうも空虚にガタガタ騒がれると、食指も動かねえ。勝手に騒いどれや。

あゝ寿司が喰いてえ。入院中のつれあいも呼びだして、おふくろも娘も一緒に。高二の頃、試験時直前になると映画が観たくなったのを思い出す。金につまってくるのとよいけいぜいたくがしてえ。

「岩館真理子「どんな大人に／なるんだろう／あいつは——」イラスト略」

病院の宿直明けに続く仕事は一刻でも早く切り上げ、シヤバに出てえと思う。つまらないゴト、週刊誌と漫画、そして同直者とのだべり。患者が少ないこと、「仏」のでないことを念じてひたすら朝をまつ。夜勤の看護婦だつてどうせそんなところだ。リッチな医者との結婚を夢見たりしてヨオ。もっと稼ぎの乏しい教室勤務のパート(秘書なんて呼ばれている)なんざ、もつと切実で悲惨かもしれねえ。いいようにもてあそばれて

ポイ、だもんね。待合室に、捨て子もあつたりして。骨の髄まで小市民的な自足と保身でテンブラになつちまつた職域ときちや、独力で生活をアツプしようとする彼女らの実行力は、多々裏目になつちまう。『ファンシィダンス』(岡野玲子)の男を頼らず、『p.i.e.』(岡崎京子)の男を喰いものにする、若い女たちのあつけらんとしたまぶしいたたかさを發揮しようとするものもいりや、同僚の姿から学んじやつて、さつさと農家に嫁いじまう女もいる。何もせんもん家、それをひっくりかえしたワーカーホリック、パチンコ中年、ごますり男、公務員製ガラスの動物園の小窓からのぞく男の世界はもろくて、漫画にもならない。なんか、お粗末になつちまつた。「鮎」から岡本かの子の同名の「短編」の話や、ばなの文体を動かす視点に触れるつもりが……、一晚アイタカラカ?

まっくる通信 第二十六号 (90/03/18)

本通信も存続が危うい。Aがパソコン・ゲーム、今度はいわゆる、RPGにのめりこんじゃった。くるくる空模様がめまぐるしかった街から帰ったのが四時前。昨夜インディジョンズみたいなゲームもMCのPDSにあるんだよ、といっておいたのが事の始まり。パウンドハウスのブルーベリー・パイに合わせてコーヒーをいれてくれたお礼に、ちよっとしたマニユアルを見せDungeon of DoomのPDSバージョンを覗いたら、夕飯の準備もそっちのけ。インディ教授になりかわって、勘だけを頼りに、経験値を高めアイテムや食料を拾いながら地下へ地下へと降り始めては度重なるモンスターとの戦いに敗れ去る。チョコマカしたグラフィックスとサウンドがマッチした爽やかなノリの操作性も手伝って、春休みはハマってしまえそう。

楽しい一日をアリガトウだなんてニンマリしながら、キーボードに触らせてくれたときや十時をとくに回っていた。お昼の繁華街は人で一杯、イエ・パンもエンジェルもイタ・トマも見送りの三球三振。待つて食べる程のうまいものなし、なんて唱和しながら、本屋の二階でシー・スパ+飲み物にありついた。麺が細く明太子が効いててイカやカニがうまく、いかにも内野安打といった腹持ち加減。本の上で物を喰ったら賢いウンコの人になる？胃袋が欲するように精神は食べたがらず、なんてネ。やつぱりここはスツキリ、センター前のヒットで決めたい。混雑するショッピング・フロアをブラブラ目に食べさせるだけ、頃合いをみてカシラ、ハツ、ジャガバタ、ジョッキのサイクル・ヒットで決まったぜ。

「高野文子「勝負よ！」イラスト略」

いま、街で一等元気なのは中学生たち！彼等は一体何と勝負しているのか？

まっくる通信 第二十七号 (90/03/19)

病院立ち寄り日和の天気にもかかわらずゲームの魅力で、AはMACに直行したのだ。お見舞のドーナツが待っていたのも知らずに。補習の行き帰りにマニユアルのコピーを熟読し、ヘルプ画面の隅から隅まで読むくらい入れ込んで挑戦したのに、昨日の五時間の成果にも及ばなかったのだ。あんなソフトもういらないなどとボヤキながら、ひっそりかえって

『TAWARA』を見つけた。勉強する気も失せたみたいに。我が家のゲーム・チャンピオンだからといって、そうそううまくいったまるかい！カナダからやってきた大食漢のジョディが戦いたいばかりに言葉まで学んでいることをした「やわら」が、いざ挑戦をうけてたつたところで「番組」は続くとなつて、Aはまたも八つ当たりのバチアタリ騒ぎなのだ。柔道で一戦交える場を作り出すためにカナダ娘が日本語を身につけるといふ今週の要もどこ吹く風まかせ、われわれが日常言葉とかかわる意味なんて思ってもみない。

面白くも可笑しくもない積み重ねの生活の場所にはいろんな意味あいがあるわけだが、強いて挙げれば総合性ということと現実性ということがいつも潜在的な課題として、あるということだ。常に自分の位置や姿勢を押し付けられたり、いつでも大衆的な現象や現実の文化現象にたえず接触しそこからあおりをくらっているのがわれわれの居場所になっている。そこで総合性をつきつめ、ひっかぶっている現象的な波をかきわけようとしている無意識の野にはいつも対象に対する受入の仕方、了解の仕方が立ち働いている。そのまわり続ける独楽の軸になっているのが言葉だ。そして生命の糸で編んだ鞭をさまざまな形で当て続けてやがて死ぬ。たとえば岡本かの子の短編には女流という域を超えた、言葉による見事な達成を窺うことができる。心眼に裏打ちされた言葉が寄せるように地勢を描写し、生命の際立つ型を動かしてみせる。言葉の何が凄いかといえ、人の心を動かすことがあるということにつきる。

「ワールド・カップ長野大会」スキャン画像略」

熊の湯でのスキーは最高だったそうです。今日電話がありました。来年！

まっくる通信 第十八号 (90/03/20)

寒い彼岸の前夜だ。辞書登録出来ないなんていつていたが、なんのことはない。いつのまにかユーザー辞書が一杯になっていただけのことだった。ものはためしと、新規辞書を設定して登録してみたらスナリOK！そこまではよかったんだが、これまで使い込んできた辞書が開けなくなったというか使えなくなってしまった。また語彙を使いこなしながら、シコシコ登録していくよりしょうがない。最初から快適な使用環境を提供してくれるパソコンなんてあるわけがない、無意識に使いこなせる道具にするまでにはとてつもない手続きが要求される。「突然ですが、マです。お父さんの邪魔をしにきています。では、お父さん続けてください。」ナンジャコイツは！旺文社大学受験講座のテープを流しながら、傍に来てキーボードを叩いていった。自分の出番がないのがつまらないのだ。夕方の電話でたぶん話していないことといえば、ゲームの成果だろう。昼に三十一階までナイトで降りてきていた。夕食後に続きをやって三十三階までクリアしたところだ。あと七階クリアすれば宝珠（オーブ）が手に入るのだ。マのことでだから近日中にやっちゃうだろうね。なんだ、ナンダ、話がそれしまったではないか。

〔DAのスクリーンショット略〕

これが、いまマのお気に入りのデスク・アクセサリです。画面はアニメです。

〔アニメのスクリーンショット略〕

とっても可愛い動きが見物です。

樂書か、落書か訳の分からんものになってきおった。退院も決まらんうちに読物のベスト・ワンもできちゃったようだけど、別居というか距離が離れているまたとないときに自家版詩集も暇つぶしにどんなもんだろう。おまけの縦書きソフトがなんとか仕上げてくれたらまず見てもらって、よかったら新潟の山田さん、「試行」の吉本さん、「同行衆通信」の鎌倉さんにも……

まっくる通信 第二十九号 (90/03/21)

“ If you build it, It will come.”

孤立することがどこかで連帯することであり、孤立は自立するための前提であつた。そんな六十年代を抜けてきた若者たちもそれぞれの現実の中で、働き、父となり母となつて家を営み、家族と交歓し、かつての親たちの年代を暮らしつつある。少なからず死の影を感じたりしながら、世間しがみつく程の物も見当たらない。隠居も御免こうむるが、身すぎ世すぎにこの執着は何故と問う声がよぎる。そんなとき、人は思わぬ彼岸を描きだしたりする。

北陸にしてはまぶしいくらいの春の彼岸の休みに、娘と（休みとなれば二人して遊んでばかり）「フィールド・オブ・ドリームス」を観てきた。

朝イチだったから入りはまあまあ、市内で環境最悪の劇場だったけど、思い入れや重たさを感じさせることなく、それでいてしたかな力感でもってみずみずしい幼児性を秘めた一体感をもたらしてくれた。こんな映画体験はあの「E.T.」以来のことかもしれない。黄昏せまる球場（彼岸）に現れ、若かりしころからの野球人の夢を果たした父と、妻と娘が見守るなかで、キャッチボールする主人公。ボールの音がだんだん遠ざかり、やがて灯りのついた球場へと延々と連なる車のライトの列を浮かびあがらせて映画は終る。破産しかけた家業はどうなるんだ、球場の向う側のとうもろこし畑に消えちまったいまはしがたないプログラマーのテレンス・マン（原作ではロビン・サリンジャー）はどうなったんだ。巻上ってゆくクレジットを

見ながら感じるそういった疑問がまた感動を高めることになる。軽いノリがまたたまらないのだ。

「スキヤン画像略」

主人公レイ・キンセラの家、そしてシュールレス・ジョー。ラスト・シーンは欠けちゃった

まっくる通信 第三十号 (90/03/22)

昭和が終わって「平成」二順目ももうすぐ四月、どこもかしこも、どうつものいつもアジア的遺制がくすぶるなかで負け続けているだけ。暗くなった駅前で「米の自由化反対」だなんて唱えてデモったりしてやがって、うすら寒くなってきたぜ。いったい何のための決起集会なんだ。上部団体のプログラム通り足を引きずってみせているだけじゃねえか。政党とつながり、政治的な問題をくわえこむだけで生き延びてきただけの組織に、戦う労組もまっとうな組合もありはしない。とつくの昔に足が地から離れてしまっているのに、一体全体なにを力みかえているのだ。思想原則なくして、どんな力が発揮できよう。それもどこからの受け売り、借り物でなくして、獲得した、あるいは獲得しつつある思想ひとつもたずして、迷妄の網に絡まれることを思想と取り違えて躍るくらいなら、無思想に立ち続けることにエネルギーを費やすことだ。あたりきとされている公式にしたって、てめえが引き寄せかみくだけねえことには、パワーはおろか屁にもなりはしねえ。〈ほんね〉と〈たてまえ〉の自己分裂と二重化なくして涉れぬ渡世だなんていいながら、味噌も糞もいっしょくたにして公私の自己分離さえまっとうできていない。国家あるいは共同制がもたらす疎外の成立とその存続というケジメがつけられているから、何処にいたって個も自己分裂をまぬがれえないし、不可避に二重化せざるをえないのだ。誰だって向う側へ抜けだしたいと思うこともあるさ。だが、共同幻想の彼岸に描かれる幻想はいただけない。あくまでも、こちら側にいて国家のもつ枠組と足枷を離脱してゆく方途を探り続けるべきなのだ。

「岡野玲子「キュアリアス・ツールリスツ」イラスト略」 やっと、先が見えた。オッシャレーでいこう！

まっくる通信 第三十一号 (90/03/24)

ザーザー降りの一日、春らしい話題の一つでもと思うが、何もないのナイナイづくし。せんだつての「北目」紙上で、能登のゴルフ場開発反対運動の隠れ蓑だろうが、文学者別荘御用立地と称して大岡信や宮尾登美子の名前が挙がっていた。頼むほうもどうかしているが、それにきちつとした対処の一つもできない「文学者」のほうがもつとたちが悪い。「文学者」の反核運動がボシャツてせいせいしたと思っていたら、今度はエコロジスト運動の「地方版」ドサ回りがよ。それを記事にして売っているジャーナリズムなんざアホの上塗りじゃねえか。どんな環境問題にしろ主役はまず地元住民にまかせておけばいいのだ。売名行為にさえないないぜ。

「作品」を離れた時の「文学者」の醜態だったら、数年前の埴谷雄高が吉本隆明との「アンアン」から「反核」そして「政治と文学」に及ぶ論争でヘドが出るくらいに演じてくれている。二番煎じにもなっていないのに観客なんてつくもんか。そんな暇があったら両巨頭のやりとりでもじつくり読み返してみるんだね。なんもわからなかったら、「朝ジャ」に頼まれたビートたけしの、自発的に打ち上げた松岡祥男の、それぞれ面白くてためになる介添え文を読んでみる。それでもなんにもワカラン人だったら、「文学者」なんぞやめるこった。ただでさえ「文学」の旗色が悪い御時世だから、ナンチャッテ。こちららが、悪態ついてもゴマのはえ。誰の目にもとまりやせぬ。それにしても昨年暮れの牛島町内会の連中はやりました。関東から進出してきたカラオケ軍団を、内輪で話し合って退去に持ちこんでしまった。あたりまえといえればそれまでだが、これが本来の姿だ。

昨日今日のニュースとて、県立図書館で井口村神職の手だし事件。県教委へも抗議していたというから、口もだす男だったらしいが、公開初日に「86富山の美術」所収の昭和天皇コロージュ図録を破ってみせた。四十三というから戦後生まれではないか。美術館公開時も今も、公開非公開

の公共性をめぐる線上にアジア的専制権力の残存としての天皇制が串刺しになっている。高度情報化社会のただなかだっているのによ。煮ても焼いても食えない話ばかり。

「月夜にワインのイラスト略」

我が家の楽しい話題はあと一週間の退院ばかり。三十一日に決まって先が見えたおふくろはメチャやさしい。玄関に長靴、風呂上がりに栓を抜いたビールにおつまみつき。バドミントンも楽しくなった。

まっくる通信 第三十二号 (90/03/25)

日差しのわりに、風がやたら冷たく寒い日曜日だった。午前のスポ少お別れ会への行き帰りと、午後のマとの本屋散歩(クレハ自工前バス往復)ですっかり冷えてしまった。帰宅一番娘の紅茶であつたまりながら観た、春場所千秋楽は巴戦による優勝争いとなり、2・5場所分位楽しめた。一時間あまりうろついて店内で一番楽しめたのはルーミン・ワールド。まだインクが匂う『月刊あすか』の「恋はニュートンのリンゴ」が立ち読みの時間を忘れさせてくれた。今月の宿直の晩に読んだ高橋留美子「サイズの幸福」のヒマ潰しにしかないレベルをぐっと超えている。甘木三時子(小二)と泡盛給二(大二)との男と女にゆきつけないかわりあいをめぐって、双方のとりまきや世間が思い込みのジャブを応酬する展開がいノリになっている。例によつてハッピーにはしよつた終り方がいささか甘い、小説でいえば、『海燕』四月号の吉本バナナ「メランコリア」並みの出来だった。『Z』の相撲の後にビニールを破つて読んだ。『あすかコミック』大島弓子四冊目の「毎日が夏休み」は、ネームといいコマ割りと言いい、トンでて実に実によかつた。例えば、その十六ページ

「……ちよつと休まないか」「あの噴水のところは？」／しやら しやら しやら／なんかかわいそうだなあ 大人の人が ボーツとして

る姿って 見つめても かわいそうに なっちゃうんだ わたし／だから つい 登校拒否のことも 偽造のことも ぺらぺらしゃべつて しまったんだな あのとき……／仕事なんて したくないけど 「する」なんて いっちゃたのも この「ボー」のせい なのかも／あーもしわたしが いまの義父の立場だったら パーツとはでにあそんでから パーツとビルからとびおりちゃうけどな／「スギナどうだパーツとやらないか」「しえーつ」「スキヤンできないから引用だけ」

「サイズの幸福」に団地暮らしの家庭に棲みついた座敷童が描かれているんだが、村上春樹の「TVピープル」のタウン暮らしの夫婦の隙間に入り込んだそれ「傍線部傍点」とは違って、マス・イメーজ(都市型共同幻想)の象徴のいち(マンガ)表現としてのコミカルさに欠けてしまったのだ。かつてのルーミン・ワールドは何処へ、「ばなな」には少女マンガのノヴェライズではとても達成できない(表現)の世界がある。最近作では、「朔ちゃん」が妹の「麻由」の自死の後ただ一回だけ泣く場面が良かった。近ごろの少女漫画によくあるスクラップ家族が下敷きになっているが、文体を動かす視線のみずみずしいキレの良さが独特なのだ。たまたまこたつのある一室で弟やいとこの「幹子」と一緒にビデオの「となりのトトロ」を見終わったところで、トイレにたちそここの置物にしてあった、かつて妹の恋人だった竜一郎が旅先から送ってきたビクターの犬の切ない傾き加減に「朔ちゃん」はデジャ・ヴュの一步手前のようなところで「この世のすべての姉妹の失われた時間のために」五分ほど泣く。死者(麻由)からの視線が他者(竜一郎)を媒介(ビクターの犬)して、フツのひとたちがせき立てられるような生活の断面で無意識に流しているところを、さりげなく刻みこむようにたちあがらせてくれている。いわゆる「女流」の域を超えている岡本かの子に代表される文体の動きに見られなかった、新しさの芽生えがあることだけは確かだ。ゴー！ゴー！ばなな！おまえに欠けているのは色気だけだ。エロスも描いて！

まっくる通信 第三十三号 (90/03/26)

入院リハビリ中のつれあいとベッドを並べる農家を営むおとなりさんからジャガイモを頂くなんて思ってもいなかった。家に着く頃はずっしりと重かったぜ。種芋の芽を切り取った断面に灰をまぶして、一つ一つ丁寧に埋めてゆく手がささくれだったこと、掘り起こしたときのあの湿った独特の匂い。田舎にいた頃、田や畠仕事はいやいやする日常だった。郊外生活者となつたいまは、そのひとつたりとも満足に出来ないと思う。体でおぼえたもの、手についたものなにな一つない。ときおり農業問題について考えたりするようなどころへなりさがってしまった。ところで本論として各論と二度の吉本・農業論を聴いて以来、序章と言うべきものにどこかで遭遇したことが気になっていたんだが、「柳田国男論」や「共同幻想とジェンダー」と遡って七十年代初頭の講演パンフレットのなかにやつとみつけた。

高度経済成長政策の標識である重化学工業の、工業的生産性が問題とされたその対極で、農村からの労働力の流出にともない、必然的に農業問題がもうひとつの標識としてせりあがってきた。

農業（村）問題は、高度成長政策なるものをもってゆくかぎり、農業生産における資本主義化ないしは資本制化というものが、当然問題として浮上してくる。ここで非常に難かしいのは、農業経営自体を封建的な農業経営から、いわゆる資本主義的な近代的農業経営による農業問題というようなどころへ転化してゆけば、農業問題自体は解決されるか、というところを決してそうじゃないということだ。

なぜなら、大なり小なり農業問題自体が、〈土地〉というものに依存しているという単純明解な事柄がある。つまり、生産性のみに依存するのでなく、その生産―再生産という、生産過程での繰り返しのおかげで、土地制というものがどういう意味合いをもつかということが、とてもはかり難い問題になってくる。

農業経営自体を近代化してこぼれおちた農業人口を、高度成長政策によ

る重工業の方に転化してゆくということで問題が解決されるかのごとく、戦後の日本の政治支配者は、経済問題を考えてきたといえよう。しかし、本当のところ農業問題自体は彼等が考えたように簡単な問題ではなかった。その問題の焦点は、〈土地問題〉自体のなかにある。つまり、土地という問題をなされて――土地という意味は、必ずしも地代との対比範囲ということに限定されないが、それでも土地そのもののものだ。自然性としての土地ということそのものに農業が全面的に依存している、というそのこと自体の問題がよく解かれない限りは決して解決されない。

工業化と土地制――農業問題をめぐるアポリアは世界的なレヴェルからみえる。かつての中共の幹部が世界を三つに区分して、いわば後進国、中進国、先進国みたいに区別して、後進地帯が先進地帯を打倒してゆくことに現在の世界革命の課題があると発言するまでに変質してみせた原因が決していないわけではない。その必然性を生じせしめているものは、実に土地というものの自然性というものと人為性の問題の度重なる矛盾、その土地をめぐる矛盾の累積というようなものに帰着するといえよう。マルクスの理論から言ったら最大限の逸脱であり、まったく問題にもお話しにもならない考え方がなぜ出てきたかといえ、やはり農業問題、いつてみれば農業問題の基本に横たわっている土地制の人為性ということ――土地のもっている自然性ということと人工性という、そういう連関をうまく解き得ないということにそういつた理論が出てくる余地があり、また一定の影響力を占める余地がある。マルクスに言わせれば、国家の消滅なしに世界革命なんてあり得ない。あらかじめ、理論的にあり得ないということはじめから決まっているわけだ。

経済共同体的な高度成長的な考え方のなかには、何ら解放の問題もなければ、階級の問題もないという、ないないづくしへの反発として、例えば、中共が民族独立を含めた様々な闘争を革命の課題とするということ、中ソ対立というのが起こってきた。このところをもっと根底的に言ってしまうば農業問題、あるいは農業問題自体が資本主義自体によって、あるいは農業の資本主義化ということ自体によっては、どうしても解決されないということだ。この解決されない問題というのは、いわば世界

的な規模で農業問題というものが、一種のさまよえる課題、非常に大きな課題として存在するということを意味する。単に経済現象としてどうみるかというような問題に留まるものでもなく、また単に一国における高度成長にともなう様々な危機の問題なんかじゃない。現在の世界的な規模における危機の集約点 というものが、農業と密接不可分な関係にある土地制というものの、土地の自然性と人為性人工性というものの、そうしたさまよえる農業問題ということに、そしてもうひとつは、技術革新、技術振興にともなう経済共同体的な考え方、そういうものに集約される考え方との両極における激しい激突、対立というようなものとして、生じてきているといえる。これは、経済学者が経済学的に解けるといふ問題じゃなくて、一種の思想的な課題、政治的な課題というような問題として、現在まことに切実な課題として生じている。(吉本隆明「戦後」経済の思想的批判」の三章の構革論とさまよえる農業問題、『自立と日常―更に、また現在より起て―』蒼氓社一九七四年発行パンフレット 所収より要約)

「びっくり箱のイラスト略」

都市と農村というたちでの分離の時代は終わってしまったのだ。逆に高い次元での混合化というものがせりだしてきている。農村の都市化と、人工化された都市の田園化という都市と人工都市の分離作用、これらに起因したあらたに専門消費センターが先行するかたちでまわりに人を集めるという、まるで SimCity みたいなことが現実になりつつある。

まっくる通信 第三十四号 (90/03/27)

退院と一緒に復職までとりつけるなんてなにはともあれよかったねだが、その裏には食えるだけ働けば充分さといっておられない現実が口を開けている。傷の痛みを癒すいとまも与えず即刻使い物にならなくなったパートの首を切る。勤め人のやつらは会社や雇い主を喜ばすためならなんでもやるし、どいつもこいつもそれを名譽と心得てはばからない。そして

自己と自己保身にあげくれるとりまき連中はさようしからばそうでござるかのかのしたり顔の一点張り。その奴隷根性がたまらない。いけどもいけども「私利私害」は社会的分裂のぬかるみを逃れられない。かくして自己欺瞞の火種はくすぶり続ける。

たしかに消費の場面では「中流意識」というデカイ顔が幅を利かせるようになり、労働条件の改善・賃金等においてそれなりのアップを許すように日本の社会は力を持ってきた。しかし、その一方ではパート労働の層の強化と常態化に勤しみ使い捨て労働力の形成にも成功してきているのだ。パート労働者と正規雇用労働者とのあいだには総ての点において月とスポンの格差があり、その固定化は動かし難いものとなってきている。

党派と派閥の下請け組織に名分にあげくれ名前前の取りかえごっこにふける肥満体の既成労働組織は転ばぬ先のわが身の安全を唱えるのが精一杯、対策ひとつみだせない退行のなかにあつて、高度資本主義社会の歪みのひとつとしてのパート労働者層の拡大という大問題をとらえきれない。恒常的失業者の排除的吹きだまりにいたつてはなにかいわんやである。その底辺層にあつては、不可抗力の入院を毎日が日曜日とみなしてやり過ごす気楽さや呑気な現実逃避の気分さえも奪いつくされてきている。

せわしくなくいつもハードな時間に追われ続ける日常性のなかにとじこめてはなさないのは、臨界点を高めながらどこまでも増強する生産とその消費を強化する流通にうながされるシステムの加速性なのだ。これこそ不眠の都市の管制塔。滞ることをしらないメカニズム、われわれは何処でどのように癒されるというのか？

「餌をとる岩魚のイラスト略」

まっくる通信 第三十五号 (90/03/28)

年度末もあと僅か、本年のわが職場への予算消化のための研修出張は四

国からの客人が重なった。今日は高知医大、明日は香川医大だという。

高知医大の図書館の整理係長の話だと、開学以来十年を超えるそうだが、課内旅行はおろか、アフター・ファイブの和気あいあいを楽しむこともないという。ありきたりの日常性だけが先行し、いかに現状を維持するか、いかに破局を回避し続けるかだけが、最大の課題あるいは関心事となっているのか。

すべては利害と人事の秤によってのみ計量され、その要件は変更不能と思いが慣らされてしまったのか。戦後、経済的にも文化的にも一定方向において行き着いてしまったおとしまえのつけはあらゆる職域を吹き抜けてしまったのだろうか。眼に触れやすい近辺を無造作に見渡しても、高きにありて人を誘うよう存立できなくなった、理想家の夢などことごとく埋没林のように没し去り踏みにじられてしまっている。

力を合わせ、手をつくし節目が何事かであった、われわれの感性と生活の基底を編みあげていた〈アジア的共同性〉の縫い目がほだけ弛んでしまったのだ。さりとて、人々は、現在の高度化された資本主義の生産形態と社会様式にはまだどこかなじみきれないでいる。そんな心の隙間やおおいかぶさってくる支配システムの収奪と抑圧にいたたまれず、思わず回顧的になったり、心の鞍部で佇むばかりなのだ。そして乗越しからの眺めの様相に従うように、それぞれ慰撫と感じる方向へ吸引されるという仕組みになっているのだ。

どんなに酷薄化する職域や日常の関係であってもビリッケツの障害物レースのように踏ん張っていかいぐっていくすべを手放しちやならない。現実社会の利害の網の目からめとられたり、そのうわつらの力関係でつぶされたり、そんなことは承知の上で、なおかつそこで強いられる二重性を甘んじて受けるより手だてがない。けれど、負け犬はゴメンこうむる。小賢しい自足と保身だって悪くはないさ。だが、その居心地がどんな

ものであるかを知っているだけだ。

接待で疲れたわけでもないのにネクラツペーみたいになりおってイカン。花よはよ咲け！

「吉野朔実「世界が変わりました」イラスト略」

まっくる通信 第三十六号 (90/03/29)

昼休み、久しぶりにウオーミング・アップと基本練習、そしてシングルの真似事で汗をかいた。がらんとした体育館に二人つきり、照明全部点けはなして豪勢なもんだぜ。一昨日の火曜の昼は誰ひとり相手が来ず、さりとて引き返す気にもなれず薄暗いなかでストレッチをやり、ぐるぐる走ってみた。飽きる前に疲れがくるというていたらくだ。ジョギングから帰ったばかりの知人に声をかけられ、二階の卓球フロアにあがったら、窓際になんと立派なウエート・トレーニング機械のセットがデーンと構えているではないか。年度末予算の消化購入品はこれくらいでなくっちゃ、と圧倒されるくらいの威容だ。千人以上の構成員を擁する職場だというのに誰ひとり使っちゃいない。同僚と一緒に、アドバイスを受けながらみまねで始めてみた。メニューをいくらこなさないうちにアゴがでてしまうではないか。いまにはじまったことではないが、何という非力、五、六年前の打ち続いた不調以来、つくづくおもうのは、生きるってやつは基礎体力の問題ではないかといううらぶれた話でしかない。アジア的な共同幻想の呪縛がうすれゆく一方で生活意識を掘り下げることままならずおれもおまえも社会システムの圧迫にきつく追いまわされ、のがれるすべもない。それどころか救いの幻影にひたる時も場も奪い取られつつある。せめて基礎体力でも備わっていたら、いささかなりともどうにかなるのではないかと、情けなく思ってしまったりするのだ。

為政者のご都合で給料が半額支払になったり、遅配になったりけちくさくてやってられネエーぜ。いかにその日の暮らしむきが苦しくさしせまっ

ているといったって、なりわいが生産運動や労働行為の呪海にもみくちやにされているといったってヨォー。誰がなんとしたまおうと経済活動自体が自己目的になんかなりっこないのだ。誰ひとりとしてお上の政治・財政事情や社会の景気の変動にふりまわされる必然性などもちあわせてなどいないのだ。寝ても覚めても社会様式や日常形態は国家の共同性の掌におさまっている。孫悟空みたいにその強制力および影響からのがれ去ることはできっこない。だが、国家意志による政治支配とおれたちの現存のあわりにはまちがいになく〈キレメ〉と〈ズレ〉が隠されている。この幻想の起源からうちつづく領域があつてこそ、否定の根拠が持続するとともに民衆的存在の対象化の契機にとらえられたりするのだ。資本にからめ捕られ、労働力商品として金縛りになることから一步でも解かれ、生産のメカニズムや労働神話のお目こぼしを吹き飛ばす〈道理〉は明快である。なによりも労働時間の短縮の獲得。電算化の大波小波をかきわけてでも、全生産時間のうちの労働時間の占める割合を減らすことだ。いかなる手段に抛ろうとも、一家全員がやすらかにのびやかに暮らせるように、ガンバれる体力を使え！官僚末端ゾンビや働きレプリカントなどまっぴらゴメン。遠くまでゆくんのだ。

まっくる通信 第三十七号 (90/03/30)

やつてきました最終コーナー、じゃない別居通信の最終回。姉さん一家が夕食後に訪ねてくれて、飯やもめのエンディングも盛りあがってしまった。

ゆきあたりばったり、なりゆきまかせのパソコン・パフォーマンスもおふくろのかけがえのないバックアップやいてくれるだけだなものかの娘の、そしてコントロールもさだかでないくせのあるよれよれ投球をこぼさず受けとめ拾ってくれたつれあいのおかげだ。日頃の、妻子おふくろにささげたわが身の想いもうわつらだけ、からめてからみればなんのことはない。なけなしの関係なくして何のわが身ぞ、だ。いまの職場にきて明日でちょうど十年、手も足もでずに、ただいたずらに後退するだけ、声や

言葉のひとつも放てない不能の歳月の内側で、このひそかな寄る辺に伏せてきた。

社会的抵抗体としての役割を果たすどころか、停滞と阻害の機関としての弊害ばかりをはびこらせる労組の末端に組み込まれた職場から、いかなる組合とも無縁な職場に放られた感触をじつくり噛みしめながら遠いポーランド情勢を読み捨てられた新聞に見ていた学生食堂の夏。なにかの席で「ほんとうは組合運動なんかやっていたおまえさんは欲しくなかった」といった課長に、「おれなんか来たくてここにきたんじゃない」と返したのはどのあたりだったろうか。例の「カラ超勤問題」でゴタゴタし、独り苦戦を強いられたときも、たとえ組合に身を置くことになっても、現状では思想的に離脱し、止揚の途へ進むいいにないと思いきめていた。結果は見てのとおり、無為の内実にさらされるだけ。みっともないザマーさらせだ。

ポーランド問題を軸に動いてきたこの十年、高度化を重ねた資本主義社会は完全にそれも無意識的にプロレタリア革命を社会主義社会をクリアしてしまった。昨年来われわれに届けられてくる、東欧の大激変は確実に民衆の現在を塗り変えるものだ。新たな未知の〈現在〉に向けて。

このつぎ、何かすることがあつたら、もっと自在に、もっと着実に、と自分にいいきかせてひとまずオワリ。読んでくれて、ありがとう。

「大島弓子「毎日が夏休み」イラスト略」

十字路からの発言 本の一言：司書の卵

吉田恵吉

司書課程を修めて卒業する学生が全国で毎年どれくらい数えてはいないが、本と人とのあいだをめぐって読ませる玉川重機の『草子ブックガイド1』の吹き出しに、司書有資格者としての就職率が1%未満とあった。

普及率では全国平均に劣っていない富山県の公共図書館で働く正規雇用者の割合は、平成二十一（二〇〇九）年度に二十・一%になり、非正規化率は七十九・九%で全国三位だったようだ。

例年二十〜三十人の学生が選択履修をしている、地元短大の司書課程で前期後期それぞれ二コマ、四科目の時間講師として一本釣りされて九年目になる。

頭数で女子が男子を圧倒する履修生の、年々右肩上がりの真面目度に反比例するように、就活欠席者のない年度授業日は減少傾向にある。この頃の学生はインターシップで図書館を体験できても、司書として正規雇用への道は閉ざされているにひとしい。

「コネで図書館を紹介してもらえませんか」と声をかけてくる女子学生や、「どうしたら図書館に就職できましたか」と尋ねてくる男子学生を前にした時のとまどい。企業に内定していたのに書店でアルバイトしながら、委託や派遣による図書館勤めへの迂回路をたどるような卒業生もいた。

一九六〇年代に東大図書館が「近代化」を掲げて路線改革にとりかかりはじめた頃、地方の大学図書館にまず公務員として就職し、在職のまま東京の大学でひと夏の司書講習を修了し、司書職を続けられたりした。今じゃ地方で司書の卵として孵化できる受け皿が選択でき、司書課程を巣立っても、図書館を目指すルートがない閉塞した網から、出るに連れぬカゴの鳥たちの教室に向くことに。

ところで、平成二十三（二〇一一）年度二学年前期授業で学生が書いてくれた「司書をめぐる作文」から抜き書きしてみよう。

○司書として働く喜びをどのように思うか？

- ・さまざまな形で本との出会いを作り出す場に関われる。
- ・パスファインダーの作成などで利用者の情報探索の便宜を図れる。
- ・館種の異なる図書館サービスを実現したり生涯学習の場の形成に携われる。

- ・地域住民へ情報「未組織化古文書や地域資料の存在」を発信する図書館サービスができる。

- ・知的好奇心に応える膨大な書物が織りなす圧倒的な知的空間に介在する司書としての存在感。

- ・「成長する有機体としての図書館」に共鳴する司書としての「進化」と「成長」。

○司書として働くつらさをどのように思うか？

- ・図書館の現場における身体的ならびに知的対応能力の不足。

- ・業務委託による正規司書業務範囲の縮小と非正規雇用の不規則な労働時間や低賃金。

- ・利用者のクレームやマナーの悪さへの対応。

- ・貸出・返却のセルフサービス化により高度化する情報要求に、単なる本好きを超えた幅広い知識が必要とされること。

- ・収集資料の情報次数の高次化により組織化したコレクションの付加高次情報次数を低次化するようにして利用者を一次情報へ導くこと。

- ・顕在化していない情報要求への対応。

○司書となるために自分に何が足りないと思うか？

- ・館種を異にする図書館で働くのに必要な幅広い知識・情報・視野。

- ・子供への応対や利用者との幅広いコミュニケーション能力。

- ・利用者に奉仕する心構え。

- ・レファレンスサービス対応能力。

- ・興味や関心を持てる分野の偏りの無さ。

- ・情報アクセス環境の変化に対応できる柔軟性。

- ・コンピューター・リテラシー。
- ・語学力と知的経験。

○司書となるために自分が適していると思うこと！

- ・本好きじゃないと勤まらない仕事の領分に向き合う意欲と持続力。
- ・子供を含む利用者とのコミュニケーション能力。
- ・特化した専門性を有する司書能力形成願望。
- ・情報次数の高次化と低次化による資料・情報サービスのシステム処理対応能力。
- ・体力や根気や協調性や記憶力。
- ・調べることへの関心力。

図書館の情報組織的というより、情報サービスの業務に片寄りがちな目線だが、来館利用者から非来館利用者まで、スニーカーネットワークからインターネットまで遠隔化された、司書の立ち位置が感受されているといえようか。

司書課程で学びながら「自分が何を知り、何を知らないか」という知識についての知識をわきまえるのが「メタ情報」だとしたら、履修生の「情報リテラシー」はしっかりしているようだ。数年前に情報検索演習の終盤にさしかかったところで、学生のひとりに「調べることそのものがわからない」と問いかけられたこともあったが、まだ言葉になっていない学生の声を聴き、それについて語ったり、質問をやりとりできる教室にはまだまだ手がとどかない。

平成八（一九九六）年八月の図書館法施行規則の一部改訂によって司書科目構成が見直され、平成十五（二〇〇三）年度から受け持つことになった「情報機器論」の授業では、使っていた教科書が難しいとか、科目内容ががわかりにくいなどと言ってくる学生もいた。今年三月の地震と津波による福島原発事故の時には、原子力エネルギーを利用した図書館システムの仕様書のひな型を提出した学生のことか思い浮かんだりした。

担当してきた司書科目の授業の始まりと終わりで、学生それぞれに刷り込まれた司書のイメージが、多少なりとも更新されたり、あるいは型破りであればあるほど良しとしなければなるまい。

だが、本と人との間を司る編集者的な資質があるか、司書としてのどのような間接的なお節介焼きができるか、そのほか図書館の内定を得て思いめぐらしたりできる機会など、司書資格取得学生からほとんど奪われてしまっている。

今年の六月に参議院決算委員会で片山総務大臣が司書や学校司書の正規化を答弁したようだが、毎年一人いると言われる学生の司書資格を認定してきた歴代の文部科学大臣は、取得学生のその後の狭き門についてどのような答弁を用意してきただろうか。

平成二十四（二〇一二）年四月から実施が予定される司書養成課程の一部変更にもなう新規教育課程の授業科目担当を打診され、関係書類を前に時間講師から身を退く潮時到来とばかり、学科長ならびに関係教官との話し合いに臨んだのだが……。たとえ寄り切られようとも、これからの司書科目履修生に空手形を振り出すような真似はしたくないし、担保もないのに教壇の保証人になるようなことなどもつてのほか。

図書館情報学を専門に入学した学生においても、卒業と同時に図書館員になれる割合よりも、留年や休学や退学などで四年で卒業できなかったりする割合の方が高いだなんて、図書館の将来を担うべき人材のロジステックそのものを見直さないことには司書の卵は孵らない。(2011.10.10)